

# ソードアート・オル フェンズ

みっつー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

鉄華団の白い悪魔、ガンダム・バルバトス。鉄華団という、前に進むことしか出来なかった少年兵達を奮起させたその圧倒的な強さ。その強さにある男は人類の英雄、アグニカ・カイエルを重ねた。

しかしその強さも永遠ではない。悪魔は討ち取られ、パイロットと共にこの世を去った。

しかしバルバトスのパイロット、三日月・オーガスは相棒であるオルガ・イツカと共に異世界へと転生された。

それでも彼らは歩みを止めない。

—いつか見る、本当の居場所の為に。

この小説は機動戦士ガンダム鉄血のオルフェンズとソードアート・オンラインのクロスオーバー二次小説です。

独自解釈や若干オリジナル設定があります。

敢えて言おう！作者はアグニ会会員なのでたまにアグニ語が飛び出すけど許してください。

途中から異世界オルガというより異世界三日月化する可能性があります  
注意！この作品はソードアート・オルガンとは全く関係ありません。

# 目次

## アインクラッド編

|     |              |     |
|-----|--------------|-----|
| 第一話 | 鉄と剣の世界       | 1   |
| 第二話 | 攻略会議         | 32  |
| 第三話 | コボルトと火星(仮)の王 | 47  |
| 第四話 | 月夜の黒猫団       | 75  |
| 第五話 | 新月           | 94  |
| 出会い |              | 109 |

## アインクラッド編

### 第一話 鉄と剣の世界

「ああ、やつと終わった……」

そう呟きながら椅子に背を預け、作成したデータをパソコンで上書き保存しながらデスクに置いた缶コーヒーを一口飲む。

日本では珍しい銀髪に髪の毛の大半をバックにしておきながら一本角のような大きい前髪をして、褐色肌の大男――

オルガ・イツカは椅子から立ち上がった。

「さてと……帰るか」

彼は出された仕事を終わらせ、いつも通り定時ピッタリに退社をしようとタイムカードを切ろうとした時。

ポン、と肩を叩かれて足を止めた。

「少しいいかね？ イツカくん」

「……なんすか、課長。」

「確か君って、甥っ子と同居してるんだよね？」

「ああ、まあ……」

「良かった、なら喜んでくれるかもだが……コレ、受け取ってくれないかね？」

そう言って彼は左手に持っていた大きめの紙袋をオルガに手渡す。持つとずっしりした重さを感じる。おやつ等では無さそうだ。中を覗き込むとそこにはヘッドギアのような物が入っていた。この世界で得た記憶からそれを引っ張り出す。

「おお……コイツは確か、ソードアート・オンライン………でしたっけ？」

世界初の完全仮想世界を再現したVRMMORPG。

サービス開始はされていないが、βテスト版をプレイした者には先行発売をされるためにサービス開始前から課長は持っていた。

「そう、実は私βテスト入っていたので早めに買えちゃってね。なはは。因みに明日サービス開始。だがこの手のゲームはあまり得意ではなくてね。だからこれを君に譲ろうと思ったのさ。まあ甥っ子さんと二人で楽しみたいまえ！」

「ど、どうも」

オルガはその勢いに圧倒されながらもそのゲームを見る。この世界に来てから平和すぎる空間にいたので少し慣れずにいたからか、ゲームというのはやっていなかった。

「……ミカってこう言うゲームに関しちゃどうなんだ？ つつーか、これは俺もやるってことだよな……」

足早に去っていく課長を見ながらオルガは呟いてそのまま退社していく。

実は早朝に同僚から「あくゝツカ、お前コレ預かっててくれねえか？諸事情があつてな。遊んでてもいいからさ！」と言われながらソードアート・オンラインとその起動用の機械、「ナーヴギア」を渡されていたため、既に二つ目なのである。ソードアート・オンラインという大人気のゲームがサービス開始前に二つも手に入るといのは宝くじに当たったレベルの強運だろう。しかしどうせなら宝くじの方が良かったなとオルガは現金な事を考えた。

電車で揺られながら夕方の街を歩き、一室の小さなマンションのドアを鍵で開けて玄関で靴を脱ぎ、スーツを脱ぎながらハンガーにかける。

「ミカは……寝てんのか。」

制服姿で床に転がり、すやすやと寝ている黒髪の少年――

三日月・オーガスを見ながらオルガはやれやれ、と言いながら三日月の頬をペチペチと叩く。

「おいミカ、起きろ。帰ったぞ」

「あく……オルガ。お帰り」

「学ランだからいいけどよ、高校上がってブレザーにでもなつたらそう言う事すんじやねえぞ？折れ曲がつて大変になつちまうからよ」

「そっか、じゃあそうしないように頑張るよ。……で、それ何？」

オルガが持ち帰ってきた紙袋を指さしながら三日月は聞き始め、オルガは紙袋から2本のゲームソフトとナーヴギアを見せる。

「なにこれ」

「ソードアート・オンラインってゲームだ。まあ、明日は学校が休みなんだろう？ 昼頃に始まるらしいからやってみたらどうだ？」

「んー、オルガが言うならやってみるよ」

三日月は棚をガサガサと探し始め、オルガが別の用途で購入したナーヴギアを持って来てオルガの目の前に差し出す。

オルガはその行為に首をかしげるが、三日月はそれを質問されたかのように説明しだす。

「二つあるならオルガも一緒にやろう」

「おお、結構嬉しいこと言ってくれるじゃねえか。よおしミカ！ 明日俺は有休取るからよ、一緒に行くぞー！」

オルガはそう言って三日月と共に笑顔になれることに喜びを感じ、翌日を楽しみに待った。

しかしそれは地獄の始まりだと言うことは二人は勿論知る由もなかった。

―彼らは一度別の世界で命を落とし、何の因果なのか別の世界に転生していた。

同じ容姿、同じ名前、同じ戸籍を持って。更には自分たちの住む場所も行くべき場所も覚えていた。

その不思議なこと、それも前世の記憶が死んだ直前の記憶を中心にかけ落ちていることにも最初は困惑したが、もうすっかり慣れ切っていた。

この不思議な世界に来てからも三日月は笑うことがなかったが、ゲームと言う娯楽を樂しめる事で三日月はまた感情が灯った。

オルガは様々なことを思い出しながらも布団に入り、そのまま目を閉じた―。

『さあ始まりました、今週のMMOストーリーム！』

まずはPVを見ていただきましたが、これは先週の発売日の様子かな。行列を作った彼らのお目当ては……ソードアート・オンライン！』

家に置いてある仕事用のパソコンで告知されている生放送の映像を見ながら、オルガと三日月はコンセンートの確保とナーヴギアの接続を試していた。

しかしこうして見ると行列を作るほど人気な物をよく二つも入手出来たとまた自分の運の良さに驚く。

前世でもこういう作業は少ないながらもやったことはあるがこれはそれと比べると格段に小さい。モビルスーツ等はないがそれが不要ないと考えるならここはあの世界より良い世界なのかもしれない。ここなら本当の居場所に辿り着けるのかもしれない。三日月は口に出さずにそう思った。

カチャカチャガツチャガツチャといじっている内にケーブルは接続が完了し、二人揃ってゲームが出来るように準備は整った。

「よしミカア。これで接続は出来たぜ。あとは待つだけだ！」

「うん、じゃあ俺はその間に飯でも食うよ」

三日月は慣れないことに頭を使って疲れたのか、棚から携帯食を取り出してむしゃむしゃと食べ始める。

オルガは生放送の映像を見ながら今か今か、と時間を待ちつつも時折窓の外を眺める。

「なんか、仕事サボって遊んじまうなんてちよつと前までの俺らじゃ想像出来なかったよな……」

「だね……ってかオルガ、あと少しで時間」

三日月はパソコンに表示された時計を指さしてオルガにそう言った。こういった仕事一つ一つから馴染んできていると知って少しオルガは嬉しくなりながらも顔には出

さずに頷く。

「おお、忘れてた。さてと、まずはコイツを頭に被ってから布団に寝て……『リンクスタート』……ミカ、今の手じゅー」

リンクスタート、その言葉を言ってからオルガは突如として意識が切り替わり、仮想世界へと旅立った。

多数の脳への情報に関してのセッティング、ログイン用のアドレスとパスワード、βテスト時のデータを使うか否か。

それらの情報にオルガは的確にパネルを操作して情報を入力していく。

(名前か……よくわかんねえし、オ、ル、ガ……つと。)

情報を入力し終わると、『welcome to sword art online!』とポップアップメッセージが表示される。そして幾つものカラフルな線が視界を埋め尽くす。

そのままオルガは仮想世界に降り立つ――

前に、青い画面と共に白い文字が表示されてSEと共にまたもう一つのメッセージが表示された。

『サーバーエラー発生、一度ログアウトしてから再度ログインしてください!』  
「何やってんだあああああああああつ!」

オルガだけはサーバーエラーで弾かれ、強制ログアウトさせられてしまった。

致し方なくオルガは五分ほど待ち、もう一度ナーヴギアを被ってから再度ログイン。

もう一度情報を打ち込み、今度こそポップアップメッセージと共にソードアート・オンラインの世界に降り立った。

「おお……なんか、変な感じだな」

オルガは目を開けて、自分の手を見て自分の物ではないと判断する。

更に、身長も多少変動しているためいつもの自分よりも視点が低く感じていた。

それだけでなく、褐色肌から白い肌のために本当に別人のように感じていた。

「さてと、ミカを探さねえとな……」

オルガは現実そっくりでありながら微妙に違うようなこの世界を見ながら早速歩き始める。

アインクラッド。

それがこの世界。内部には幾つもの都市と多くの小規模な街や村、森と草原、湖までもが存在する。上下のフロアを繋ぐ階段は一つのみ……

その全てが怪物がうろつく危険な場所にあるが、一度誰かがたどり着けばそこ下層の各都市を自由に行き来できるようになる。

今その世界に約一万人のユーザーがいる。剣と戦闘の世界、またの名をソードア―

ト・オンライン。

「つってもどこにいるんだミ……」

オルガが呟こうとしたところで、後ろからポンと手を置かれてオルガは振り向く。

「オルガ」

「……誰なんだよお前はあ……」

名前こそ *M i k a d u k i* と表示されているが、明らかに三日月ではなかった。

アバターだから、と言う理由ならばオルガにも適用されるが三日月は違った。

三日月はオルガと決定的に違う点があった。

「三日月・オーガスだけど」

「どうみても女じゃねえか！」

「なんとかテストのデータを使う……って書かれてて使ったらこうなった」

そう、三日月は女だった。黒髪ロングの女性服で所謂美少女と呼ばれる部類の。ゲームなので美形な顔しか用意されていないのかもしれないがそれにしても型にハマリすぎている。

「ヤマダの野郎……ミカを女にしやがって、次あつたら落とし前はキツチリつけさせてやる……」

オルガは三日月用のナウヴギアを渡した同僚の名前をボソツと呟きながら少し恨み

を込めて拳を握る。

三日月は我、関せずと言った表情で自分の服を見下ろしていた。

「まあ動きにくくはないから大丈夫だよ」

三日月はそう言ってから歩き出す。三日月は気付いていない、というか気にしていないがその動きは観察眼があるものならあつこいつ男だなと気付かせるものだった。

「おいミカ、どこ行くんだよ」

「んー、取り敢えず走り回ってみようかなって。それと外に出てみたいし」

「じゃあ俺も行くぞおー！」

カチトリタイ！モノモナイ！ムリヨクナバカニハナレナイ！

そう言ってから三日月とオルガは駆け出し、ジグザグと道を曲がったりなんだりとしながら走っているところ――

いつの間にか一緒に走っている男までいて三人の競争と言わんばかりのダツシユになった。何も合図すら出していない上に知らない男だと言うのに何か繋がりのような物を感じた。その時だった。

「おーい！そこの兄ちゃん達ー！」

「ん？」

急に自分たちが呼ばれてから三人揃って足を止めた。若い男の声だ。しかし三日月

の例もあるのでもしかしたら女かもと思ひ振り向く。

「俺?」

「俺たちかあ?」

「はあ……はあ……ふうー。その迷いのない動き、アンタらβテスト経験者だろ?」

「ま、まあ一応……」

「俺はちげえぞ……」

「俺も」

しかし当然と言われれば当然なのだがそれは赤いバンダナに赤髪の男だった。その男は走ってきてから息を荒げつつも三人にβテスト経験者であるかを質問しだす。が、オルガと三日月は当然違うため首を横に振る。

「ええっマジかよ……って言うか、俺今日が初めてだよ。ちよいと序盤のコツ、レクチャーしてくれよ」

「あ、ああ……」

「んなあ頼むよ!俺、クライン。よろしくな」

「……俺は、キリトだ」

「オルガ・イツカだ。よろしく頼む」

「三日月・オーガス」

オルガたちと共に走っていた男……βテスターである長身の男にレクチャーを頼みだすバンダナの男ことクライン。

勝手に話を決めたかのように話し出す、長身の男もそこまで嫌がらず、渋々と言うわけでもなくついでで……と言う感覚で引き受けた。

そこで自分の名前を話すが、オルガと三日月はモロに自分の名前を話してしまった。

「……SAOどころか、ネットゲすら初めての奴もいるんだな」

「ああ、そうだな……」

クラインとキリトはそう言っ、オルガと三日月に謎の視線を送る。

勿論二人にはなんなのかわからなかったため、首をかしげるだけだった。

そのあとオルガたちはMMOゲームでの鉄則、名前についてなどを言われてため息をついた。が、ため息をついている暇などなく序盤のコツを教えるために最初からアイテム欄に入っていたストレージから初期武装を取り出して装備する。

「ミカはメイスか。ミカらしいな」

「オルガは剣と盾……なんかオルガらしいや」

「どう言う事だ……？まあ、団員を守るのは俺の仕事だからな」

(前髪のことだよ)

メイスを取り出した三日月、剣と盾を取り出したオルガ。

オルガの特徴的な前髪と似ている剣を見て三日月は軽く笑い、オルガは意味を理解できず首をかしげるだけだった。因みにオルガの前髪は鎌のようになっていて前世ではネタにされていたのだが、オルガは気づいていなかったようだ。

そして、そんなやり取りがありつつも四人は始まりの町にあるフィールドにいた。

「—どあつ！ いつつつう……ま、またぐらが……」

「大袈裟だなあ、痛みは感じないだろ？」

「あ、あそつか……つい……な」

クラインは敵Mobの青いイノシシ、『フレンジー・ボア』に跳ね飛ばされていた。

その攻撃で体力を示すゲージ、HPゲージが黄色になって半分近くまで減っていることを示していた。

「言ったろ？ 重要なのは初動のモーションだって」

「んなこと言ったってよ……アイツ動きやがるしよ？」

「ちゃんとモーションを起こして……ソードスキルを発動させれば。あとはシステムが技を命中させてくれるよ」

キリトは石ころを拾い上げ、説明しながら投剣スキル『シングルシュート』を使用してフレンジー・ボアの尻のあたりに石を命中させる。

「モーション？ モーション……」

「どう言えばいいのかな、っと。ほんの少しタメを入れて、力が溜まるのを感じたら……ズパーンって打ち込む感じ！」

「ズパーンってよお前……おっ」

標的がキリトに切り替わってから突っ込んでくるフレンジー・ボアをキリトは軽くいなす。

同時に、クラインがソードスキルの構えを取って右手に持つ曲刀にオレンジ色のライトエフェクトが灯るのを感じてから、キリトはフレンジー・ボアを蹴ってクラインへ向かわせる。

「だああああありやあああああっ！」

曲刀単発スキル『リーバー』が発動してフレンジー・ボアを切り裂き、フレンジー・ボアはガラスのように砕け散って、ポリゴンとなって消滅する。

フレンジー・ボアを倒したことによって得られたSAO内での通貨であるコルと経験値を入手。

「よっ……しゃあああああああああっ！」

「おめでとう」

「でも、今のイノシシ……某有名RPGのスライム相当だけだな」

クラインとキリトはハイタッチをかわし、キリトは背中に剣を修めながらクラインに

言う。

「ええっマジかよ！てつきり俺は中ボスかなんかかと……」

「なわけあるか」

先程クラインが仕留めたフレンジー・ボアが二体出現するのを見て、クラインは落ち込む。

そんな風にクラインがソードスキルを始めて発動させて歓喜しながらまた続けている一方で――

「ぐうっ！」

「オルガ大丈夫？」

「こんくれえなんてこたあねえ……」

「でももう死にそうじゃん」

オルガはフレンジー・ボアの攻撃を捕らえられずに何度も被弾しており、HPは既にレッドゲージ……三割ほどまで少なくなっていた。

一方で三日月は感覚で体を動かしてはいるが、現実での身体能力が仮想世界でのステータスを上回っているために慣れないノロノロとした動きで攻撃を避けていた。やはり現実と仮想世界の違いに混乱しているようでもたまたまにフレンジー・ボアの突進が当

たっている。

「……………ふんっ！」

三日月はメイスを振るい、フレンジー・ボアを殴り飛ばしてからそのまま膝蹴り。

オルガはそれに飛び込むように剣を振るい、フレンジー・ボアを貫いてようやく一匹撃破。

「おお……………結構強かったじゃねえか。」

「俺らが弱いんですよ」

「そっかあ……………」

オルガと三日月は慣れない操作をしつつスキルの構えなども確認し、自分の役割などを考え始める。

キリトに心配されつつもオルガは立ち上がり、もう一度詳しく説明を受けてからスキルについてあれこれと考えていた。

「やっぱり、現実と違ってこの中だと動きが鈍いな……………」

「そんな奴俺とミカくらいだろ……………」

それに、キリトの話ならこの中で成長してけばいつか現実の肉体以上に凄くなれるらしいぜ」

「そっか、じゃあ頑張らなきゃね」

その調子で二人は狩りを続け、夕方5時になるまでひたすらフレンジー・ボアを殺し続けた。

「すっかり夕方になっちまったな。そろそろ休憩すっか？飯とかも考えてよ」

「だね。ちよつと腹減った」

「この世界の飯は空腹を紛らわせるくらいだから……」

「んじや、俺らは先に出てくぜ。サンキューな、キリト」

「別に、MMOゲームは慣れた人が教えていくもんだし構わないって」

オルガはキリトにお礼を言ってからメニューを開き、キリトに教えて貰ったログアウトボタンを押す――

こことは叶わなかった。

「……どうなってんだ、こりやあ？」

「オルガ？どうしたんだ？」

「いや、なんでかログアウトってボタンが押せねえんだ。」

「あれ、ホントだ俺も。」

「ログアウトボタンがない……サービス初日のバグか？」

ログアウトボタンがないと言う事に首をかしげつつもボタンを連打するオルガ。どうやら表示されていないだけと言う訳では無いようだ。

三日月はメニューを閉じた。

「ねえ、つまりそれってここから出られないってことだよな」

「ああ、確かにそう言うことになるな……」

四人そろってログアウトボタンが見つからず、オルガはログアウトすることの出来ないと言う状況に焦りを感じ始めていた。

「おい……何とかならねえのか!？」

「ダメだ、SAOにおいてはログアウトボタン以外、ログアウトの手段はない。」

運営側のアナウンスがそろそろ来るだろうし、そこまで気にしなくても大丈夫だろう」

「……まあ、いいか」

三日月はちよつとの間出られないと言うことならば、と我慢。

だがオルガは社会人である以上、有休を取っても仕事を家でしなければならぬ。

「まあ、こんなことが起きたんだから運営半泣きだろ」

「そーいやクラインお前、ピザとジンジャーエール注文したの5時って言ってなかったか?今5時半だぞ」

「つてあああああああ!マジかよ!さっさと出ねえと!運営早くしろ——!」

泣きながら復旧作業をしている姿を想像しながら少し笑うクラインだが、キリトのツッコミで頭を抱え始める。

そんなコントのようなやり取りで焦っていたオルガも落ち着き、三日月はメイスの素振りをしていただけだった。

その時、巨大な鐘が鳴り始める。

「おつ、運営からのアナウンスか？」

「おいキリトおま」

鐘が鳴り始めてから、急にクラインの体が青く光り輝き消失してしまう。

キリトはそれを見て転移の効果とすぐに理解したが、そのことを知らないオルガと三日月は驚く。

が、声をあげる間もなく三人は転移させられた。

「(っ)は……」

「強制テレポート……?？」

「俺らが最初にいた場所じゃねえか……」

「なんだ……?？」

他のプレイヤーたちも強制的に始まりの町の最初の場所に戻されており、その場は騒めき出していた。どうやら他のプレイヤーも混乱しているようだ。そうわかったオルガは少しだけ安心した。

その直後、赤い六角形のパネルが出現し無数に増えたそれは空を覆って赤く染めた。

更にそのパネルの隙間から垂れるような赤い液体……血のようなものが一点に溜まり、巨大なローブを作り上げた。

「なんだありやあ……」

『プレイヤールの諸君……私の世界へようこそ。私の名前は茅場明彦、今この世界をコントロール出来る唯一の人間だ。』

「なっ……」

キリトだけは茅場明彦、と言う単語を聞いて少し驚いたがオルガたちはそんなことなど知らない。

『プレイヤール諸君は既にメインメニューからログアウトボタンが消えていることに気付いているであろうが、これはゲームの不具合ではない。』

「はっ……」

『繰り返し……これはゲームの不具合ではなく、ソードアート・オンライン本来の仕様である。』

その発言には、三日月もオルガも驚きを隠せずに固まった。前世にて理不尽な境遇にあつてきた二人がこれなのだからキリトやクラインも時を止めたようにピタリと止まり動かなくなる。

『諸君は自発的にログアウトは出来ない。』

また、外部からのナーヴギアの停止、解除もありえない。もしそれが試みられた場合、ナーヴギアの信号素子高出力マイクロウェーブが、諸君の脳を破壊し生命活動を停止させる。』

茅場明彦からの説明を受けて、プレイヤーたちはさらに騒めき出す。まず状況を正しく理解できている者などここに居るのだろうか。そう思った状態で素早く頭が回ったオルガと三日月は今の状態を素早く分析した。

「何言ってるんだアイツ……頭おかしいんじゃないやね？なあキリト？」

「そうだそうだ、んなことあったら当然法を守る側が黙っちゃあいねえはずだ……」

クラインとオルガも急にそんなことを言われても納得するわけもなく、茅場を疑い始める。

「でも、これ外したら俺たち死ぬんでしょ？それが嘘でもホントでも、外すわけにはいかないよ」

「信号素子のマイクロウェーブは、確かに電子レンジと同じだ……リミッターさえ外せば、脳を焼くことも……」

三日月とキリトは冷静に整理し、警察などが動けないことやナーヴギアの仕組みについて考える。

ナーヴギアの構造上、茅場明彦の言っていることは実現可能であり、1万人が人質同

然のために動けないと言う事。

「じゃあ電源を切れば……」

「ああ、確かにぶつ壊しちまえば……」

「ナーヴギアには内臓バッテリーがある」

「……でも、無茶苦茶だろ！」

「ああ言う奴は無茶苦茶に出来てるもんだよ」

クラインとオルガの提案も一蹴するかのようになり、キリトがそれでも出来ないと言う事を言い始めてオルガは膝をついた。

三日月の他人事のような発言にも、クラインは頭を抱えられずにいらなかった。

『残念ながら、プレイヤー諸君の家族、友人などが警告を無視しナーヴギアの強制解除を試みた例が少なからずあり……』

その結果、213名のプレイヤーがアインクラッド及び現実世界からも永久退場している。』

「死んだってことかよ……」

「213人も……?」

「信じねえ……信じねえぞ俺はっ!」

『御覧の通り、多数の死者が出たことも含めこの状況をあらゆるメディアが報道してい

る。よって、既にナーヴギアが強制解除される可能性は低くなっていると言ってもよからう。諸君らは、安心してゲーム攻略に励んで欲しい。』

茅場明彦が少し指を動かして操作するだけで、大量のニュース画面や映像が周囲に表示された。

涙を流している女子高生の映像や、被害者の顔写真がアップされている映像……現実世界で報道されている局と一致した、完全なるリアルタイム報道ニュースだった。

『しかし、十分に危惧してもらいたい。このゲームには基本的蘇生手段は存在しない。ヒットポイントが0になった途端、諸君らのアバターは永久に消滅し……同時に諸君らの脳がナーヴギアによって破壊される。』

死ねばナーヴギアによって殺される。その言葉を聞いてから死ぬ危険性が更に高まり、本当に自分が死ぬ瞬間を想像する者までいた。

キリトも例外ではなく、死を想像したのか少し震えだしていた。自分が攻撃を受けてHPが0になり、ガラスのように砕け散ってポリゴンとなって行く姿を……

『諸君らが解放される条件はただ一つ、このゲームをクリアすればよい。』

現在君たちがいるのはアインクラッドの最下層、第一層である。

各フロアの迷宮区を攻略し、フロアボスを倒せば上の階へと進める……第100層にいる最終ボスを倒せばクリアだ。』

「クリア……？第100層？出来るわけねえだろ！βテストじゃロクに上がれなかったんだろ!？」

『諸君らのアイテムストレージに、私からのプレゼントがあると云う事を確認してくれたまえ。』

「プレゼントだあ……？」

四人は右手でメニュー画面を開き、アイテムストレージの欄を確認する。

そこには『手鏡』と言うアイテムが追加されているだけ。

それをオブジェクト化で手に取り、手鏡を見つめた。

「おわあああ!!？」

「クライン!!……うわっ!!？」

手鏡を見た途端にクライン……だけでなく、プレイヤー一同の体がまた青い光で包まれた。

キリトやオルガたちも例外でなく、青い光で包まれた彼らは――

「う……大丈夫か？キリト。」

「あ、ああ……つて、お前……誰?？」

「いや、お前こそ誰だよ……」

「オルガ、大丈夫?？」

「ミカも……つてミカお前……」

「あ」

もう一度手鏡で自分の顔を確認するキリト、オルガ、三日月の三人。

そこに映っていたのは、先ほどまで自分の顔とも言えたSAOで作り上げたアバターではなかった。

現実世界にいる自分の顔、髪形、肌の色、骨格だった。

他のプレイヤーたちも例外ではなく、作り上げたアバターが解除されていたために皆現実世界の自分であると認識し始めた。

三日月のアバターも女であることは変わりなかったため、男の姿に戻って声も変化していた。

「つてことは……」

「お前がクラインか!？」

「おめえがキリトか!？」

「で、そっちにいるデケエのがオルガで……」

「小さい方が三日月……か?」

お互いに指さして認識し合うキリトとクライン。

二人はすぐにオルガと三日月も指さし、混乱し始めるクライン。

「な、なんでえ〜？」

「す、スキャン……ナーヴギアは高密度の信号素子で、顔をすっぽり覆っている。

だから、顔の形を把握できるんだ。でも、身長や体格はなんで……」

「ナーヴギアをつけたとき、キヤ、キヤリブレーション？つてので体をあちこち触ったじゃねえか。」

「……正直ピンと来ねえな。ミカ、お前は どう思う？」

「全然」

オルガと三日月にはなんで現実世界の肉体を再現されているのか理解できず、クエスチオンマークが頭の中で増え続けるだけだった。

「そっか……じゃあその時のデータを元に俺たちの体を……」

「でも、なんで？なんでこうなったんだ？」

「答えは……どうせすぐにアイツが教えてくれる。」

三日月が茅場明彦のAvatarを指さし、四人は茅場明彦に目を向ける。

『諸君は今、何故？』と 思っているだろう。

何故ソードアート・オンライン及びナーヴギアの開発者である茅場明彦はこんなことをしたのか……と。私の目的は既に達成されている。私はこの世界を作り、鑑賞するためだけにソードアート・オンラインを作った。』

「茅場……」

背筋に冷たい汗が伝う。しかしそれに気づかないほど茅場の発言は衝撃的だった。そして同時に小さな違和感を感じたがしかしそれはすぐに消えていった。

『そして今、全ては達成せしめられた。』

以上で、ソードアートのオンライン正式サービスのチュートリアルを終了する。

プレイヤー諸君の、検討を祈る……』

茅場明彦のアバターは腐ったように力を無くしたかと思つたら、また血のようになり、赤い空へと吸い込まれて行つた。

そのまま空を覆っていた赤いパネルも消滅し、元の空間へと戻された。

(……………)これは、現実だ。

ナーヴギアを開発し、完全な仮想空間を生み出した天才茅場明彦……

そんな彼に魅了されていた俺にはわかる。

彼の宣言は、全て真実だ……この世界で死ぬば、俺は本当に死ぬ……)

プレイヤーたちが固まったように動かなくなつてから数秒。

手鏡を落として割つてしまい、錯乱する者もいれば、力なく座り込んで涙を流す者もいた。

だが大半のプレイヤーたちは「出せ」と騒いでいるだけだった。

他のプレイヤーたちが騒いでいる間に、空間を覆っていた透明な壁も解除されていることに気づいたキリトはクラインの手を引っ張る。

「ちよつと来い。」

「え、あ、ちよ……」

「俺たちも行くぞー！」

「わかつてる」

クラインを引っ張って走り出したキリトを追うように駆けだすオルガと三日月。

四人他のプレイヤーたちの少ない場所に走り出し、キリトは落ち着いてから話を切り出した。

「いいか三人とも、俺はすぐ次の村へ行く。三人とも一緒に来い。……アイツの言葉がホントなら、この世界で生き残るにはひたすら自分を強化しなくちゃならない。VRMMORPGが供給するリソース、つまり俺たちが得られる金や経験値は限られている。始まりの町周辺のフィールドは、全て狩りつくされるだろう。効率よく稼ぐには、今のうちに次の村を拠点にした方がいい。……俺は危険な道もポイントも知っているから、レベルでもすぐにたどり着ける。」

キリトはマップを表示しながら説明し、メニューを閉じる。

「ああ、俺たちは右も左もわからねえんだ……少なくとも俺はこの話に乗るぜ」

「オルガが言うなら俺も」

二人は頷き、軽く笑う。幾つもの戦場に出てきた二人からすればこの空間もそこまで狂ったものではない。本物の戦場程地獄ではない。この時はこう思っていたのだ。

「そうか、クライン……お前は どうする？」

「俺は……俺は、他のゲームで知り合ったダチと徹夜してこのソフトを買ったんだ。アイツら、広場にいるはずなんだ。置いてはいけねえ……」

そう言つてクラインは広場の方向を見る。そちらにはまだ混乱しているプレイヤーがいるはずだ。おそらくそこにはクラインのダチも。先に死んでしまった213人に含まれているのではないか。ということは流石に誰も口にはしなかった。

「悪い、おめえにこれ以上世話になるわけにはいかねえよな……だから気にしねえで、お前から次の村に行つてくれ俺だつて前のゲームで、ギルドの頭張つてたからな。おめえに教わつたテクで、何とかして見せらあ……」

キリトについていくことを決意したオルガと三日月。

しかしクラインは自身の友のために、キリトへついていくことはしないと宣言した。

こんな状態でしかしクラインは自分の仲間の為に動くこうとするその姿はオルガと三日月の二人に何かを見せた。

「そうか……なら、ここで別れよう。」

何かあったら、すぐにメッセージ飛ばしてくれ」

「ああ、お前の友達の居場所は……お前が作ってやれよ、クライン」

「おう」

「じゃあ、またな……クライン」

キリトとオルガの別れの言葉にクラインは頷き、それを聞いてから三人は背を向けて歩き出す。

しかしそれを呼び止めるように、クラインは三人を呼び止める。

「キリト！オルガ！三日月！」

クラインは何を言おうとしたのか言葉に詰まり、キリトたちは何でもないのかと判断してまた歩き出そうとする。

「……キリトよ。お前、ホントは案外可愛い顔してやがんな。結構好みだぜ。オルガは前のアバターよりもカッコいいしよ……」

三日月も三日月で、普通に可愛い顔してんな。」

「……お前もその野武士面の方が、十倍似合ってるよ！」

「ヒゲ生やしてた方がカッコいいよ、クライン」

「ああ、さっきのアバターよりいいじゃねえか」

三人とクラインは言葉を交わし、そのまま走り去っていく。

一瞬キリトはクラインがいた場所を振り返るが、もうそこには誰もいない。

それでも歩むことをやめる気はなく、ひたすらに走った。

町を出て、フィールドに入り土を踏みしめて走った。

「うううあああああああああああつ！」

道を塞ぐかのように出現した狼を相手に、キリトは走りながら剣を抜いてソードスキルを発動させた。

青色のライトエフェクトが光り輝いて狼を貫き、一撃でモンスターを仕留めきる。

ソードスキル、バーチカル。単純なソードスキルとはいえ難しい筈のクリティカルヒットを出した。

（俺は……生き延びて見せる……この世界で！）

「うおおおおおおおっ！」

世界に挑む少年の叫びが、木霊した。

## 第二話 攻略会議

デスゲーム開始から、1か月が経過した。

その間、2000人もプレイヤーが命を落とし、帰らぬ人となった。

プレイヤーの5分の1が失われたのにも関わらず、第1層は未だに攻略されていなかった。

βテスターの中でも強さはトップクラスのキリトでさえもボスの部屋に辿り着くことはなかった。

オルガや三日月が加わってキリトの戦う環境は決して悪いものではなかったのにも関わらず。

「そろそろだな、攻略会議」

「ああ……」

ボス攻略に向けた会議が開かれる、と第1層では話題となりその攻略会議の場所へと足を運ぼうとしていたキリトたち。

彼らの装備は初期武装から多少なりとも変化していた。キリトは革の胸当てが鉄製に、剣がクエストで入手した物になっている。剣の名前はアニール・ブレード。一層で

手に入るものの中ではかなり高性能な武器だ。

それでもキリトには、「これでボスを倒せるのか……」と、一抹の不安が胸の中で騒めき出していた。βテストのボスの強さを思い出す。

「はーいーい！それじゃあ、そろそろ始めさせて貰います！今日は、俺の呼びかけに応じてくれてありがとう！俺はディアベル、職業は……気持ち的に、騎士<sup>ナイト</sup>やってます！」  
広場に響き渡る声で、青い髪の青年が明るい話し方で広場に集まったプレイヤーたちを笑わせながらも挨拶をする。

近くからカツコイイぞ騎士<sup>ナイト</sup>様！など声が上がっている。

このSAOには一般的なゲームにある職業、職<sup>クラス</sup>のようなものは存在しない。しかしディアベルの装備はブロンズ系の防具に武器は大振りの直剣と騎士<sup>ナイト</sup>と言ってもあまり違和感はない。

その明るさには怪しさなどのものはなく、胡散臭い出来事などに敏感な三日月やオルガも怪しむことはなかった。

「もう聞いている人もいるかもしれないけど今日、俺たちのパーティが、あの塔の最上階でボスの部屋を発見した」

プレイヤーたちが笑いながら茶々を入れたりしているところに、ディアベルは真剣な目つきと声で言った。

「俺たちはボスを倒し、第2層に到達してこのデスゲームも”いつか”クリア出来るってことを、始まりの町で待っている皆に伝えなくっちゃあならないっ！」

それが！今ここにいる俺たちの義務なんだ！そうだろう!?皆あつ！」

真剣な声音と迫真的な表情から、本気で第1層を攻略して人々の魁へとならんとしている事をプレイヤーの皆は察した。

騒めき出していたプレイヤーたちも、ディアベルの言葉を受け止めてから段々と拍手や笛を鳴らしたりなどと盛り上げ始めた。

（綺麗ごとって感じだけど、中々いいこと言うじゃないか。ディアベルって奴……）  
「オツケー！それじゃ早速だけど、これから攻略会議を始めたいと思う。」

まずは、六人のパーティーを組んでみてくれ！」

「えっ！」

「どしたあ？キリト」

「い、いやその……俺……」

キリトは、他人に話しかけられることはともかく他人に話しかけることは慣れていなかった。

所謂コミュニケーション障と言う部類であり、学校などにもある「自由にペアを作ってください」と言う事は地獄そのものだった。

(前言撤回……コイツやっぱ悪い奴だ……異常なまでに)

と理不尽な怒りをディアベルに感じてキリトは拳を握った。その拳には汗が止まらなく出てくる。

「フロアボスは、単なるパーティじゃあ対抗できない。パーティを束ねた、レイドを作るんだ！」

ディアベルが説明しているうちにプレイヤーたちは次々とパーティを組み始め、あたふたとしている内にキリトはすっかりあぶれていた。

……三日月とオルガも含めて。

「すっかりあぶれたね」

「まあ、人数的に仕方のねえことだ」

オルガと三日月はこの事態を楽観視しているが、キリトからすれば「ふざけてんのかお前らは」と言いたい程であった。

1人になってあぶれると言う事は目立つことであり、目立つと言う事はコミュ障からすれば死にたくなる程に恐れるものでもある。

意地でも孤立を避けるため、キリトはオルガたち以外にまだパーティを組めていない者はいないかとキョロキョロと辺りを見回す。

キリトの目に留まったのは赤いプーケを装備した細剣使いの姿。

「彼女は……」

「ん？知ってんのか？キリト？」

見たことがある。この前迷宮区でレベリングをしている時に倒れていた女性だ。あの時はオルガと三日月が休憩している時だったのでとりあえず声をかけると余計なことをと言いたげな視線を向けられた。

「あ、ああ。まあな」

ゆっくりとしかし着実にそのプレイヤーの近くに座る。細剣使いはほんの少しだけ避けるがその間に三日月が入る。そしてキリトを挟んで反対にオルガが座った。

もうほとんどない勇気を絞り出してその細剣<sup>フエンサー</sup>使いに声をかける。

「んんっ、アンタもあぶれたのか？」

「……あぶれてない、周りが皆お仲間同士みたいだったから遠慮しただけ」

それをあぶれたっていうんだよ。と言おうとしたが流石にそこまでは言えなかった。

あの時の変わらず、そのプレイヤーの目つきは鋭かったからだ。

「ソロプレイヤーか。なら俺たちと組まないか？」

……ボスは1人だけじゃ攻略できないって言ってただろ。だから今回だけの暫定だ。」

細剣使いはキリトの言葉に返すことはなかったが、静かに頷いてキリトのパーティー申

請を受けた。

プレイヤーネームは『Asuna』、カタカナに直せばアスナ。声と名前から考えて女性だ。それもキリトと三日月に近い年齢だと思われる。

その世代の女性がゲームをすることがおかしいと言う訳では無い。むしろ自然だ。しかしあれだけの行列に並んでまで欲しいと考えたかとする少し不思議だ。

(まさか、同じパターンってことはないよな……)

キリトはまた不安を胸に抱えながらも、無事にパーティを組むことが出来た。

オルガや三日月たちとも組んでいるため、元々1人ではなかったのだが。

「よし、そろそろ組み終わったかな。じゃあー」

「ちよう待ってんかー!」

広場の外側から大きな声でディアベルの声を遮り、ダンダンダンツ、と数段飛ばしで広場の階段を下ってから大きくジャンプ。

「おつとお……」と言いながらそのまま着地し、ディアベルの隣に並び立った。

オレンジ色の髪をトゲトゲとした髪型にしながら両手剣を背中に持ったその男は親指で自分を指さしながら――

「ワイはキバオウつてもんや!ボスと戦う前に、言わせてもらいたいことがある。こんにちは!今まで死んでいった2000人に詫びいれなアカン奴がおるはずや!」

キバオウは広場に座っているプレイヤーたちをスーツ、と指さしながら声高らかに発言した。

その言葉はキリトにも突き刺さり、キバオウがキリトをβテストと見抜いていなくてもキリトにその言葉は重く響いていた。ただその中で唯一βテストの存在を理解していない三日月は首を傾げたが。

今このボス攻略会議に参加していないクライン、彼は今生きているにしろキリトがいればこのボス攻略会議にも参加できるレベルだったのかもしれないなかった。

「キバオウさん。君が言う奴らとは、元βテストの人たちと言う事……かな？」

「決まってるやないか！β上がりどもは、こんクソゲームが始まったその日にビギナーを見捨てて消えよった！奴らは美味しい狩場やら、ボロいクエストを独り占めして自分らだけポンポンつよなって、その後もずううつと知らんぷりや。こんなかにもおるはずやで！β上がりの奴が！ソイツらに土下座さして、貯め込んだアイテムを吐き出して貰わな、パーティメンバーとして命は預けられんし、預かれん！」

「……テメエに預かって貰う命でもねえよ」

オルガはキバオウに毒づいた。三日月とキリトがギリギリ聞こえる位だとは思っていたがキバオウにはしつかり聞こえてたようでオルガの方を向いて怒鳴り出した。

「なんやて!？」

「当たり前だろうが。さつきからお前の言ってることはただ自分が金やらアイテムを欲しい奴ってだけだ。βテスターだけが強くなってるってんなら、ここにいる奴は全員βテスターってことになるじゃねえか。それにな……物事の一部分だけを見てそう判断してるって時点で、アンタは人の命を預かれるほど余裕もねえチンケな奴ってこった」

「おんどれええ……さつきから黙って聞いてりやよう言うやないか！」

「カツカするなよ、ここはボス攻略会議をする場所だぜ？」

キバオウが感情を露わにしてオルガに怒りですが、オルガはフツ、と小さく余裕の笑みまで浮かべてキバオウを笑った。

確かにこのSAOデスゲームが始まった瞬間に自らを強化するβテスターは全く悪くないと言われるとそうではない。確かにキバオウの言う通りβテスターが初心者相手に手取り足取り教えていれば犠牲者は半分程度には収まっただろう。しかし、皆が皆そんな自己犠牲の精神を持っている訳では無い。キバオウは興奮していたのだ。言い方は悪いがその綺麗事を必ずなせると信じていたのだ。

それにキバオウは一つ分かっていないことがある。βテスターにも死人が出ているという事だ。確定した数字はないが情報がある訳では無いが経験と知識があるから安全という訳では無い。逆にそれで調子に乗る可能性もある。キリトすらもオルガと三日月がいなかったら死にかけていた戦いが何度もある。βテスターが全員ソロだった

らと考えたらほぼ全滅という結果でもなんもおかしくはない。

「オルガ、その辺で……」

「わあつてるよ」

今にもオルガに掴みかかりそうなまでに興奮していたキバオウ、それを見てただただ挑発するような笑みを浮かべるオルガ。

そんな一触即発の空気を遮るように、一つの手が上がった。

「……発言いいか？」

「え、ええで、なんや」

スキンヘッドでチョコレート色の肌をした身長2mはあろうかと言う男が、キバオウの前に歩き出してから見下ろした。

キバオウは思わぬ身長の違いにたじろぐが、オルガも同じほどの身長であると言う事は気づいていなかった。

「俺の名前はエギルだ。キバオウさん、アンタの言いたいことはつまり「元βテスターが面倒を見なかったからビギナーが沢山死んだ、その責任を取って謝罪、賠償をしろ」と言う事だな」

「そ、そや……アイツらのせいで初心者たちは皆死んだんや……」

オルガや他のプレイヤーたちに大声で話していた時とは違い、急に声が小さくなり始

めるキバオウ。

エギルはそんなことも気にせず、腰のポケットから茶色い手帳のような1冊の本を取り出す。

「このガイドブック……アンタも貰ったろ。道具屋で無料配布してるからな」

「もろたで？それがなんや」

「おかしいと思わないか？情報が早すぎると」

「それがなんや。そういう仕様だったんちゃう？」

大男であるエギルを前にしてビビりながらもその言葉を返すキバオウ。会話さえ聞かなければいじめられているようにも見えなくもない。

「恐らくこれを配布していたのは、元βテスターたちだ。……いいか。情報は誰にでも手に入れられたんだ。なのに沢山のプレイヤーが死んだ。その失敗を踏まえて、俺たちはどうボスに挑むべきか……それがこの場で論議されると俺は思っていたんだがな」

エギルのその声で、ボス攻略会議の場を荒していたと言う事を知らしめられたキバオウは「フン！」とだけ返してから広場に座り直した。キリトはキリトで助かった、と言う顔をしながら息をつきオルガはまた笑いながらキバオウを見ていた。

そんな中三日月はキバオウに対してもエギルに対しても、我関せず。と言った表情をしながらアイテムストレージから取り出した木の実をパクパク食べていた。

「……じゃあ、再開していいかな。ボスの情報だが、例のガイドブックの最新版が配布された。それによると、ボスの名前は『イルファング・ザ・コボルトロード』以後コボルトロードって言わせてもらう。それと、『ルイン・コボルトセンチネル』と言う取り巻きがいる。こちらは以後センチネルって言わせてもらうね。ボスの武器は斧とバツクラ、4段あるHPバーの最後の1段が赤くなると曲刀カテゴリーのタルワールに切り替わり、攻撃パターンも変わる。と言うことだ」

ディアベルが情報を読み上げると、1つ1つ語られる度にプレイヤーたちは騒めいた。

それぞれでヒソヒソと話し声が広がり、ディアベルの姿勢などが見て取れていた。

「攻略会議は以上だ、最後にアイテム分配についてだが……金は自動均等割り、経験値はモンスターを倒したパーティの物、アイテムはゲットした人の物とする。異論はないかな？」

ディアベルが広場を見渡すと、手を上げたり不満を募らせている者はいなかった。

オルガたちもこのルールには納得であり、首を縦に振っていた。

「よし、明日は朝10時に出発する。では解散っ！」

ディアベルの一声で座っていた者は立ち上がり、ディアベルを囲むように称賛の言葉を送ったり謝罪しようとするキバオウをディアベルが止めたり。信用の輪が広がって

いる中で、細剣使い―アスナは広場を最初に立ち去って行った。そのことに気づいていたのは、キリト、オルガ、三日月の三人のみだった。

時は過ぎ、夜になった噴水広場。

デイアベルとパーティーを組んだり、攻略会議で中心になって居たメンバーたちが酌み交わしていた。その隅つことも呼べない端に座っているアスナは、黒パンをかじっているだけだった。

「……結構美味いよな、それ」

「確かに、コイツあいじんじゃねえのお？なあ？」

「うん、これくらいデカくて硬いと、「食ってる」って感じがして美味い」

「座ってもいいか？」

黒パンを齧るアスナの隣に座ろうと声をかけるキリト、アスナは返事も何もしないため、沈黙は肯定とすることにしてキリトは隣に腰掛ける。

が、アスナはナチュラルに嫌がって数歩離れて距離を取った。出来た間に三日月が座り、オルガはそのまま地べたにドカッ、と座った。

「……本気で美味しいと思ってるの？」

「勿論、この街に来てからは一日一回は食べてるよ」

「当たり前じゃん。嘘つく意味ないでしょ」

「ああ、今まで食ってきた飯……このゲームん中じや最高に美味いぜ」

SAOにはNPCが店を開いたりしていて、そこで食事を済ませることが出来る。勿論、現実世界と違って何も食わなくても力が出なくなったり餓死したりはしない。しかし三大欲求にはさすがに三日月達も抗えなかった。この黒パンをどうとも思わないアスナの言葉にキリトはポケットから小さな小瓶を取り出す。その小瓶を三日月の隣に置き、三日月は「おっ」と言いながら小瓶を見る。

「まあ、ちよつと工夫はするけどな。」

「工夫？」

「そのパンに使ってみろよ。」

アスナは小瓶に人差し指を当て、人差し指が小さな光に包まれて少し驚くが、そのままパンに塗り始めた。

三日月もキリトが手に取る前にササツ、とパンに塗って瓶の中身を空にしていた。

「あ、全部使ったな三日月……」

「まあ、まだ一つあるからいいだろ」

オルガがポケットからもう一つ瓶を取り出してキリトに手渡し、二人でまた瓶の中身を取り出してパンに塗った。

「これって……クリーム?」

「うん、美味しい」

オルガはクリームつきの黒パンを口の中に詰め込み、目を閉じて味を深く感じる。

三日月も黒パンを急いで食べていることからそんなに美味しいのか、と思いつつもアスナは恐る恐る黒パンを齧る。

「はぐ……!」

アスナはその味の変化に驚いたのだろう。次の瞬間には黒パンは彼女の手から欠片ひとつ残さず消えていた。このクリームを最初にのせたとき、キリトはパサパサで粗いパンがどつしりとしたケーキに変わったと言っていた程だ。

黒パンを食べてから、アスナは「ほわく……」と息を漏らした。プーケで隠されている綺麗な顔を一瞬だけキリト達に見せた。その顔にキリトは見とれたのか硬直して、三日月は「へー」と言いそうな顔をしてアスナを見つめた。

アスナは恥ずかしくなったのかそっぽを向くと二人は自分の行いに気付いて元の状態に戻る。

「1個前の村で受けられるクエスト、『逆襲の牝牛』ってクエスト。やるならコツを教えるよ」

キリトの魅力的な提案にアスナは頷きそうになったが、すぐに首を横に振った。

「……美味しいものを食べるために、私はこの町まで来たわけじゃない」「じゃあ、なんのため？」

キリトの美声という訳では無いが、耳障りな部分のない少年の声に油断したのか、アスナは誰にも言わなかったことをぼつりぼつりと呟いた。

「私が、私でいるため。最初の町の宿屋に閉じこもって腐っていくくらいなら、最期の瞬間まで自分のままでいたい。例え怪物に負けて死んでも、このゲームに……この世界には負けたくない。どうしても」

大した心がけだな、と思いながら持つてきていた飲料水を飲むオルガ、だからどうした？と言った表情でデザートの木の実を食べている三日月。

感心しながらも自分の分のパンを口に放り込み、噛んでから飲み込んだキリト。

「パーティメンバーには死なれたくないから、せめて明日はやめてくれ」

その後、そのまま会話が続くことはなく3人と1人は解散した。

## 第三話 コボルトと火星（仮）の王

翌日。第1層の森のフィールドで、第1層攻略のために集まったレイドパーティたちが行進を続けていた。

「確認しておくぞ。あぶれ組の俺たちの獲物は、『ルイン・コボルトセンチネル』ってボスの取り巻きだ」

「わかってる」

アスナはフードをより深く被りながらキリトの言葉を返す。まるで1人でも大丈夫と言っているように感じた。

しかしこれを見れば最悪死ぬどころでは済まない。キリトはその意思表示を無視して続ける。

「……俺が奴らのボールアックスをソードスキルで跳ね上げさせるから、すかさずスイッチして飛び込んでくれ」

「……スイッチして?」

「えっ」

「アンタ正気か?」

「もしかして、パーティ組むのこれが初めてなのか!？」

パーティを常日頃から組んでいるオルガ、三日月。βテストの時からパーティを組んだこともあり、テクニクも十分に知っているキリト。

彼らにとつて、スイッチと言うSAOでパーティを組む際には当たり前とも呼べるこの技術を知らないのは異常なまだけだった。

因みにスイッチとは、片方のプレイヤーがモンスターを相手にする際にソードスキル同士をぶつけ合わせ、相殺させてからもう片方のプレイヤーが隙だらけのモンスターに斬りかかる。等してソードスキルによって生まれる硬直による隙を埋めるものだ。

キリトたちのパーティでは三人とも役割などはないため、誰が斬り込むか等は決まっていないにしろ、スイッチやパリイは誰でも出来なければダメなのだ。

「うん」

「なっ……はあく……」

アスナはそれを悪いこととも思わずに頷き、キリトは肩をすぼめて大きなため息をついた。

そんなキリトたちを他所に迷宮区の攻略は進んでいき、ディアベルの的確な指示で危な気もなく迷宮区攻略組はボス部屋までたどり着いていた。

「聞いてくれ皆、実は俺、今回の一人でも欠けたら今回のボス戦を中止するつもりだった

んだ。でもなそんな心配はみんなの侮辱だな……ごめん！謝る！俺はすっげえ嬉しいよ！このメンバーなら一層を攻略できる！俺はそう信じてるよ！」

ディアベルはボス部屋の目の前に立つとボス戦前最後の話をしていった。流石に聞きなれた美声を張り上げながら喋る。もう誰も、ディアベルのリーダーシップにケチを付けるものはいない。

各地から歓声上がる。

「俺から言えることはたった一つだ……勝とうぜ！行くぞ！」

ディアベルの一声により、プレイヤーたちはよりいつそう士気が上がっていた。

重たい巨大な扉をディアベルが押して開ける。暗い部屋の最も奥の部分には第一層ボス、イルファング・ザ・コボルトロードが鎮座していた。

扉が開けられて侵入者が現れた、と言う事を察知したコボルトロードは立ち上がり、大ジャンプで土煙を上げながらプレイヤーたちの前に立ちはだかった。

その直後、ボス部屋の明かりが灯りプレイヤーたちの視界も安定するようになった。

「グオオオオオオオオオ！」

コボルトロードが一つ吠えると、取り巻きのセンチネルたちが3体出現してコボルトロードと共に走り出す。コボルトロードは初手からソードスキルを使ってくるようには見えない。ここは正直に突っ込んだ方がいい。

「攻撃ッ、開始イイイツ！」

ディアベルの声と、コボルトロードの雄たけびが戦いの火蓋を切って落とした。

「A隊C隊、スイツチ！来るぞ！B隊プロクツ！C隊ガードしつつスイツチの準備……今だ！後退しつつ側面を突く用意！」

D，E，F隊！センチネルを近づけるな！」

ディアベルの的確な指示が隊に響き渡り、主力の隊はコボルトロードと戦闘。

キリトたちF隊やD，E隊はセンチネルと対峙。これで最初とは思えないほどの確な指揮だ。恐らくそれはフィールドボス等を攻略した事からなのだろう。

「了解！」

キリトたちの元にやって来るセンチネル、センチネルが大振りにキリトへ向けてポールアックスを振り上げる――

はずが、何故かセンチネルは無視してオルガの方に一直線に駆けていき、ポールアックスを振り上げて叩きつけた。

オルガはセンチネルが急に自分を襲ってきたことを読めず、そして的確な判断も出来ずに武器防御をしようと盾をかざしたがセンチネルにポールアックスを打ち込まれる。

「ぐうっ！」

これまでに見たことない程の速さでオルガのHPが減っていく。オルガは気を失っ

たように、前に倒れ込む。HPが0になることが現実だけでなくゲーム、両方の死を表すこの世界ではHPが0になるといふことは笑い話では済まされない。

「オルガ!?なんで……」

通常のヘイト通りなら、センチネルは向かってくるキリトに殴りかかるはずであり、やや離れたオルガをターゲットなどにはしなかった。しかし運が悪いのか何かあるのかセンチネルはオルガを攻撃した。

そしてオルガのHPは0に行く手前で止まった。

安堵したキリトが頭を切り替えるように通常攻撃の横薙ぎで切り払う。

その時だった。キリトの、いやそのフロワ全員のプレイヤーの耳にある音楽が響いた。

キーボーウノハナーツーナイダーキズーナヲー

そしてオルガは指先から血のような液体を出しながらとある言葉を呟いた。それは奇しくも、『1度死ぬ前の世界』で死亡した時に言った言葉だった。

「止まるんじゃねえぞ……」

しかしそんなこと言っている間にセンチネルは再びオルガにねらいをさざめて殴りかかってくる。

「させるかー!」

そこにキリトが割り込み、片手剣ソードスキル、スラントでセンチネルのボールアックスを腕ごと落とす。

「スイッチー！」

キリトの合図を聞いて、アスナは細剣単発スキル『リニアー』を発動させてセンチネルの鎧の間を通して撃破する。

センチネルはガラスのように砕け散り、ポリゴンとなつて消滅する。

（初心者だとは思っていたが、中々の手練れだな……早すぎて剣先が見えない）

（凄いな、アイツ……）

細剣はその特性から素早い攻撃を出しやすいがだからといってこれは速すぎる。素人離れた彼女の動きを見て三人は絶句した。

「……グツジョブ」

キリトがそう一言だけ言ってアスナを褒めると、また新たにセンチネルが出現して飛び掛かってくるが、いつの間にか回復していたオルガの身を挺したブロックとキリトの横薙ぎでまたセンチネルはノックバツク。

追撃をかけようと走り込むキリトだが、その前にコボルトロードの雄たけびがしたためにそちらの方を振り向く。

「あれは……」

主力部隊のA隊とC隊の攻撃により、とうとうコボルトロードのHPバーの4段の内最後の1段がレッドゲージへと入っていた。速い。速すぎる。βテストの時もこのボスと戦ったのだが、その時は普通のゲームだったので多数のプレイヤーが死に、しかしコボルトロードのHPの減りはそこまでなかった。まるでこいつの行動パターンを知った奴がいるみたいに。

「情報通りみたいやなあ」

キバオウがニヤツ、と笑うとコボルトロードは持っている斧とバックラーを投げ捨て、腰にある突起に手をかけた。

それを見ながらもキリトは残り一匹のセンチネルの攻撃をパリイし、三日月とアスナに追撃を任せる。

「下がれ！俺が出る！」

（ここはパーティ全員で包囲するのがセオリーのはず……）

ディアベルの発言にキリトが不振がっていると、ディアベルはキリトに何かを伝えるかのように一瞬だけアイコンタクトをかわした。その表情からキリトは最悪の可能性を考えた。まるで口で伝えられたようにキリトの頭を巡る考えはキリトの思考と動きを止めた。

ディアベル。お前は。そう言おとした時にはディアベルはコボルトロードに突っ込

んでいた。

そのままディアベルはソードスキルを発動させて待機し、盾を構えて剣を持った。

コボルトロードが腰の武器を引き抜いて、そのまま構えた。キリトはそれを見た直後、コボルトロードの武器が何かを理解した。

曲刀カテゴリのタルワール、情報ではその通りだったがそれはタルワールと言うにはあまりにも真つ直ぐすぎて、曲がっているとは言えるわけもなかった。

(タルワールじゃなくてノダチ！βテストと違う！)

「はあああああつー！」

「ダメだ！全力で、後ろにとべえつー！」

攻撃パターンが違うことをキリトはすぐにディアベルに叫んで伝えたが、ディアベルはそのままソードスキルを発動させてしまい、コボルトロードに突っ込んでいつてしま

う。  
キリトの声が聞こえたのか直接対峙してタルワールでないと気付いたのか、絶望する表情を浮かべるがソードスキルのシSTEM的補助によりディアベルは従って真つ直ぐ突き進む。

コボルトロードは俊敏な動きで飛び上がり、縦横無尽に部屋を飛び回ってからディアベルの防御も間に合わない一撃を真上から振り下ろした。刀専用ソードスキル。

旋車<sup>つむじぐるま</sup>。

ディアベルに当てた筈だが何人かの巻き添えになったプレイヤーの動きが止まる。スタンだ。

助けに行こうと脚を動かす。しかし目の前に新たなセンチネルが湧き、道を阻む。まるでやらせないと言っているように。センチネルの一撃をパリイした時にはコボルトロードは次の攻撃に移っていた。

「ぐっ……ううわあああああああつ！」

そのままコボルトロードは二撃目のソードスキルへと入り、ディアベルを打ち上げるように吹っ飛ばした。ソードスキル、浮舟<sup>うきふね</sup>攻撃力はそこまで無いソードスキルだが、このソードスキルにはクールタイムがほとんどない。コボルトロードもソードスキルを打つたことによる反動はすぐに終えて次のソードスキルを打つために刀を輝かせる。

空中に上げられたディアベルを救う手立てはもうない。

「ディアベルはーんっ！」

何人かのプレイヤーがディアベルを読んだ瞬間、ディアベルが空中でソードスキルを発動させた。片手剣ソードスキル、スラント。空中に放り出された状態でのソードスキルなんてキリトすら不可能な手をディアベルは行った。ディアベルの剣が黄色に輝き、力が溜まる。落下によるエネルギーも籠ったのかその輝きは普通のソードスキルより

輝いた。

「うおおお!!」

ディアベルの美声とはかき離れた雄叫びが流れる。その顔から余裕は消え去ってこの一撃に全てをかけているように動いた。

しかしボスはそのような簡単にはいかなかった。コボルトロードの刀が赤く輝き、落下するディアベルを打つ。上、下、そして最後に正面から突く。刀ソードスキル、ひおうぎ緋扇その全てをディアベルはその身に受けた。大してディアベルのスラントはコボルトロードの耳を切っただけで終わった。

ディアベルのアバターはまるで紙切れのようにレイドメンバーを飛び越えて吹き飛ばされる。

ディアベルの元に向かおうとプレイヤーが駆けだすが、彼らを邪魔するかのようニコボルトロードがその前に立ちはだかり、吠える。

「ぐ、ぐぬぬ……」

「ディアベル！何故一人で……」

キリトは滑り込むようにしてコボルトロードの脇を抜け、倒れたディアベルの頭を上げさせてポケットからHP回復用のポーションを取り出そうとする。

が、ディアベルは残った僅かな力でそれを止め、自分のHPバーがどんどん減って

行ってしまうことを受け入れていた。

「待ってくれ……俺を救うために今は貴重なポジションを使う必要は無い……それに使ったって無駄だってことは……分かる」

「ディアベル……何故！」

確かにポーションは第一層も攻略していない今では貴重な回復アイテムだ。それに飲み終えたら全回復という訳ではなく、ジワジワと回復していくのだ。一応自動回復スキルもあるにはあるが今のレベルではではフレンジー・ボア相手でもそこまで意味は無い。とはいえ人命より重はずがない。ディアベルの手を振り払ってでも飲み込ませようとするがディアベルの予想以上の筋力値に抑えられて手が動かない。これだけの力をディアベルは自分を削って手に入れたのだ。それもみんなを支えながら、もう頭を上げることが出来ない。

「お前も……βテストだったんなら……わかる……だろ……」

「……ラストアタックポーンナスによる、レアアイテム狙い。本当に……あの時の視線は、お前もβ上がりだったのか？」

そこまで言ってキリトは自分の唇を噛んだ。自分はβテストの時にラストアタックポーンナスを取り続けたプレイヤーだったのだ。ディアベルはそれを知っていた。あの視線は今度は俺が獲るという意思表示だったのだ。ラストアタックポーンナスによる自

身の強化。そしてその強さで皆を支えたいという意思が伝わってきた。

「頼む……ボスを、ボスを倒して……くれ……皆の、ために……」

ディアベルはHPバーが尽きる寸前までそう言っ、キリトを強い眼差しで見つめてから――

そのまま体はガラスのように砕け散り、ポリゴンとなつて消滅した。

「あ……あ……」

キリトはあまりの悔しさに小さく声を漏らし、そのまま地に伏した。

デスゲームが始まった時、キリトは自分がいかに生き残るかのみを考えて、もし助けられなかった場合は三日月やオルガすら見捨てるつもりでいた。

しかしディアベルは、キリトとは違って他のプレイヤーを見捨てずに人を導くことのみを考えていた。キリトが出来なかったことを、彼はやり遂げようとしていた。

「なの……俺は……俺は……」

「なんて声、出してやがる……キリトオ！」

キリトが地面を殴りつけていると、オルガの声がした。見るとコボルトロードにパリーをしようとして弾き飛ばれたオルガがキリトの近くに來ていた。当然ヘイトを稼いだのでコボルトロードが追ってくる。

そこに三日月のソードスキルが決まり、コボルトロードは怯む。

「アイツは、お前らのために死んでいったんだ……だったら、死んだ奴には死んだ後で会える。だからよ……今は足を止めるな！」

「ああ……」

キリトは言葉を返さず、自身の剣を握りしめた。

アスナもその横に並び立ち、キリト、アスナ、三日月、オルガの四人が揃ってコボルトロードを睨みつける。

絶望するプレイヤーたちではコボルトロードへのダメージなどすらも与えられない、ならば自分たちがやる他はなかった。

「手順はセンチネルと同じだ！」

「わかった！」

「了解！」

コボルトロードは腰だめにノダチを構え、白色のライトエフェクトを纏わせてそのまま突撃してくる。

刀単発ソードスキル『辻風』<sup>つじかぜ</sup>。それはキリトではなく案の定オルガに突っ込んでくるが、キリトはそれを先読みして片手剣単発突撃技『レイジスパイク』で絶空を弾いた。重い。センチネルなんかと違う圧倒的な重さ。しかし弾ききり、キリトとコボルトロードは鏡で映したように同時にノックバックが発生する。

「スイッチイッ！」

キリトの声と共にアスナが走り込むが、コボルトロードはまだ完全に硬直状態に入っておらずノダチを無理矢理振り下ろした。

それはアスナの被っていたフードからケープを思い切り切り裂いたが、アスナはそれでも止まらず再度リニアを発動させた。

「せえええああああああつ！」

勢いよく放たれたリニアはコボルトロードの腹部に命中し、コボルトロードをそのままノックバックさせた。

キリトは座り込んだまま、ケープが破れて露わになったアスナの素顔を見て思わず見とれていたが、すぐに我に返って立ち上がった。

「次来るぞー！」

次も、次もとコボルトロードの放つ斬撃をキリトは的確に攻撃パターンを呼んで防ぎ続ける。

そしてまたノダチがライトエフェクトに包まれ、ソードスキルが放たれる。キリトはソードスキル、バーチカルで受けに向かった。

(しまった……)

コボルトロードの発動したソードスキルさんげつ幻月は同じモーションでありながら上下ラ

ンダムに発動するのだ。キリトは細かな動きからその幻月は下だと判断してバーチカルを発動したのだ。しかし、キリトの予想は外れてコボルトロードのフェイントが発動し、キリトのバーチカルは空振りし、コボルトロードのソードスキルはキリトに直撃――

「団員を守るのは……ッ！俺の仕事だ！」

する前に、飛び出したオルガが持っている剣で武器防御では無いソードスキルを発動させ、無理矢理ソードスキルを受け切る。その影響でそのまま吹っ飛んでいき、キリトを巻き込んで派手に転んだ。

それだけでなく、吹っ飛んだ影響でキリトが突っ込んでくるアスナともぶつかり体制を崩して三人揃って転んでしまった。

「オルガ！」

「こんくれえなんてこたあねえ……」

オルガはそうやって強がって見せるが、オルガのHPバーは既にレッドゲージへと下がっており、次に攻撃を食らえば本当に死んでしまう所だった。先程回復したばかりのオルガからすれば相当痛手だろうがオルガはもう一度ポーションを使おうと腰のポーションを探すがそこにポーションは無かった。先程使ってしまったのか、弾かれた衝撃で砕けてしまったのか分からないがこれではアイテム欄から出すしかなくなり、手間が

かかる。

目の前にいるコボルトロードは、そんな時間なんて与えないと言わんばかりにノダチを振り上げる。そして、顔が少し笑ったように見えた瞬間キリトたちに向けて勢いよくノダチを振り下ろす。

アスナが細剣を構えて防ごうとするが、それは最早防ぐことも出来ないただの足掻きでしかなかった。

「くっ……」

「でええええええええりやあああああつー！」

赤いライトエフェクトを纏って振り下ろされるノダチ、恐らくディアベルを殺したソードスキル、緋扇だ。一足早く立ち上がったオルガが雄叫びを上げてソードスキルを発動させる。しかしそれはコボルトロードにすら届かない、弱々しいソードスキルだった。コボルトロードは一撃をオルガに当てようと刀を微調整する。

そんな事を思った途端、緑色のライトエフェクトを纏った両手斧がコボルトロードのノダチを弾き飛ばした。大きなインパクトがボス部屋に響き渡った。ソードスキル、ワールウインド。両手斧の基本的なソードスキルだが、両手斧という重い武器を簡単に扱い、パライをした。

「うおおおっー！」

「負けてられっかーっ！」

「回復するまで、俺たちで支えるぜ！」

コボルトロードをノックバックさせ、キリトたちの回復のための時間を稼ぐと宣言した男。

スキンヘッドにチョコレート色の肌。そして無骨な装備をしている身長2 m大で嫌でも目立つその姿は、エギルだった。

「アンタ……」

「すまねえ、恩に着る！」

オルガは急いでアイテム欄からポーションを取り出し、蓋を空けて飲み干す。

キリトたちもポーションを取り出して飲み始める……が、エギルたちの隊は思ったよりも頼りなく、総攻撃を仕掛けてもすぐに弾き飛ばされていた。

コボルトロードは勢いよく飛びあがり、ノダチにまたライトエフェクトを纏わせてからエギルに狙いを澄ましてから振り下ろす。

「ヒイイイ！死ぬ死ぬ死ぬ死ぬーっ！」

エギルの隊のメンバーが一人悲鳴を上げたが、オルガだけはニヤリと笑った。

「死なねえ！死ぬるかよ！こんなところで！」

「……だろ？ミカアツ！」

オルガが三日月の名を呼ぶと、キリトやアスナたちと連携もせずただこつそりと隠れてヘイトを完全にゼロにしていた三日月が地面から現れたように飛び立った。

仕掛けは単純、キリトたちの連携に着目しているプレイヤーたちの後ろにひっそりと隠れているだけ。

ヘイトがゼロになったタイミングで地を滑るように走り出す、その単純な仕掛けで三日月は飛び出してきた。

先程コボルトロードが投げ捨てた斧を両手で掴む。当然ボスが使っていた武器なので重く、相当な筋力値を必要とする。勿論第一層では不可能なレベルの重さだ。三日月が持ち上げられるはずがない。

「もつとよこせ……お前の全部！」

かつて自分と同じ運命を辿った愛機が記憶から引き出される。白い装甲を身にまとったガンダムフレームのモビルスーツ。三日月の、そして鉄華団の象徴。ガンダムバルバトス。それはもつと重くもつと大きな武器まるで自分の手足のように扱っていた。現在はバルバトスを操るときに使ったあの突起——阿頼耶識は驚く程に小さくなっている。しかしそこに神経が集まっているのは間違いない。そこに意識を集中させる。バルバトスをいつだって感じる。形がなくなってしまうた今でもすぐ近くに感じる。視界が段々開けてくる。

「——ッ!!」

小さい声で喘ぎながら三日月は斧を持ち上げる。その時の三日月の目に緑のカラーがかかる。まるでバルバトスに近づいたように。そのままコボルトロードに投げつけるように叩きつけたその一撃。その瞬間

三日月の肩口にもコボルトロードの攻撃が当たり、三日月は左腕を切り裂かれるがコボルトロードを地面に叩きつけることに成功した。

「うん——デカすぎるけど、よかった。」

三日月が斧を叩きつけた衝撃でコボルトロードは倒れ伏し、とうとうHPバーがあとわずかになる。三日月も力の限界を迎えたのか膝から崩れ落ちる。オルガがスライディングをするようにその小さな身体を担いで逃げる。

「……アスナー！最後の攻撃、一緒に頼む！」

オルガを視界の端に捉えながら、回復し終えたキリトがアスナと共に走り込み、お互いの剣にライトエフェクトを纏わせて突撃した。

コボルトロードのソードスキルをキリトが弾き、アスナがりニア、そして最後にキリトがバーチカル。

「はあああああああああああああああああああああああああああああああああ  
あっ！」

二人の揃った声が連携を生み出し、コボルトロードの腹を切り裂くが、コボルトロードは僅かにニヤリと笑い、AIながらも勝利を確信した。

数ドットのみ、HPバーが残っていた。

「おおおおおおあああああああああああああああつー！」

しかし、そんなことはキリトにとつては想定済みだったのか、はたまた偶然の産物だったのか。

キリトの放ったソードスキルはバーチカルではなく、2連撃技の『バーチカル・アーク』だった。

斜め上へと刃が通る。巨大なコボルトロードの皮膚を切り、肩に抜けた。

コボルトロードは空中に打ち上げられ、青い光と共にガラスのように砕け散ってポリゴンとなって消えた。

「……鉄華団。」

「はっ。」

「俺たちF隊の新しい呼び名だ。こんなダセえ名前じゃイマイチ示しがかねえからな」

オルガはキリトとアスナの連携を見届けながら呟き、かつて前世で三日月と共に駆けた時の組織の名前をまた名乗ることを決意した。

そして、ボス部屋は急に音を失った。コボルトロードがタルワールではなく、刀だったことはみんな予想外だったのだ。つまりまだβテストと違う点があるかもしれないのだ。トクントクンと何かがなる。先程は終わったと確信していたオルガも槍を構え直して視線を配るその中で唯一三日月だけが、巢立ちの状態になった。

すると何処からか音が鳴った。プレイヤー達はより一層警戒心を高める。するとそこにはcongratulation! と言うポップアップメッセージが来ていた。共にコボルトロードからドロップしたアイテム、コルなどがプレイヤーたちの元に届く。

「や……やったあああああああああああああ！」

安堵したプレイヤーから歓声が弾ける。

キリトにはラストアタック・ボーナスとしてレアアイテムが添付されていた。

明るかった部屋も少し暗くなり、適度な明るさへと戻っていた。キリトも荒い呼吸を押さえて添付されたアイテムを確認していた。

『コートオブミッドナイト』。イルファング・ザ・コボルトロードからのラストアタック・ボーナスイテムだった。

「お疲れ様」

「見事な剣技だった、コングラチュレーション。この勝利はアンタのものだ。」

「カツコよかったよ、キリト」

「ああ、最高にイカしてたぜお前ら」

「いや、まあ……」

キリトが謙遜していると、周囲のプレイヤーからも称賛の声が上がってがやがやワイワイ、とキリトだけでなくオルガや三日月を称賛する声も上がっている中。

その賑やかな称賛や喜びを断ち切るように、1人のプレイヤーが大声で叫んだ。

「ーッ、なんでやつー！」

よく通る関西弁で大声を上げた人物、それはキバオウだった。

「なんでえつ、なんでディアベルはんを見殺しにしたんやあつ……」

「見殺し?」

キバオウがキリトに向けて言った言葉はあまりにも意味不明で、キリトは首を傾げるだけだった。しかしキバオウはそんなキリトの対応に腹をたててより一層声が強くなる。

「そうやろがあつー!ジブンはボスの使う技知つとつたやないか!最初ツからあの情報伝えときや、ディアベルはんは死なずにすんだやないか!」

キバオウの視点から見たありのままのこと、それはオルガも言っていた通り物事を一面だけからしか見ていなかった意見。

しかし、筋も通っているこの意見は周囲のプレイヤーたちを納得させるには十分であり、先ほどもまで称賛をしていたプレイヤーたちはキリトへ疑惑の目を向けていた。

「き、きつとアイツ！元βテスターだ！だからボスの攻撃パターンも知ってたんだ、知ってて隠してたんだ！他にもいるんだろ！βテスターども！出て来いよおっ！」

涙ぐんだ目で訴えかけてくるキバオウト、その隣のプレイヤー。その声のせいで他のプレイヤーたちはお互いに疑い合い、疑心暗鬼となっていた。

「……なあキバオウさんよ。」

「なんや！」

「アンタはやつぱり物事を一面だけからしか見てねえ。自分の知っていることだけで、物事を全部語っちゃまう」

オルガはキバオウの前にたち、キバオウを見下しながら言った。前回と違い、オルガのガタイのいい姿をキバオウに見せつけたが流石に死人が出ている状態でビビりはしなかった。それほど許せなかったのだろう。これではまたエギルが出てきても止まらない。

「ディアベルを殺したのは、アンタつっても過言じゃあないんだぜ」

「な、なに言うтонねんおどれえ！ディアベルはん死んだんは、あのβテスターが情報隠しとつたからやないか！」

「いいや、それは違うな。キリトは確かに刀を使ってくる攻撃についてはよく知ってたけどよ……ボスの武器が急激に変わったことについてなんざ、知ってなかったぜ。」

「そうでなきや、わざわざ土壇場で情報を伝えたりなんてしたりはしねえだろ。それにな……アンタが攻略会議の時、βテスターが出て来たら袋叩きにするって意思みてえなのを周りに根付かせちまった。そのせいで、キリトは抑圧されて名乗ってから情報提供だつて出来たかもしれねえのにな……」

「オルガはかつて自分を支配していた大人達を再び見るような冷酷な目をしてキバオウを見つめていた。SAOというデスゲームに巻き込まれていつの間にか道を踏み外した男を。」

「な、ななな……いや、だってあのβ上がりの奴が……ワイは……ワイは悪く……」

「キバオウは自分ののでかしたこと、として周りにも知られていることを思い出して頭を抱え始めた。」

「もういいよ、喋らなくて。面倒だし……」

「三日月はブツブツ独り言を言って頭を抱え続けるキバオウを背にし、そのままキリトの元へ歩き出した。」

「ねえキリト、次はどうすればいい?」

「ああ……次は転移門の有効化だ……けど、今はこの状況をどうにかしなきゃならない」

キリトは下唇を噛んで後悔していた。

「製品版ならβテストの時と違うことがあるだろう」。その一言を言うだけで攻略会議でボスのスキルを予測することが出来た。

ディアベルの視野が狭まることもなくなり、キバオウのβテスターへの偏見もなくなっていたかもしれない。

オルガや三日月たちにこんな風に迷惑をかけることもなかったのかもしれない、と。

「……つたく、仕方ねえな。」

オルガはダン、と床を踏み鳴らした。

「お前ら、よく聞け。ディアベルが死んだ以上、次の頭つてのがいなきやあこの攻略組は破綻しちまう。だからよ、その頭つてのは俺がやってやる。攻略のための組織として俺、キリト、ミカ、アスナの4人で組む『鉄華団』を中心としてな。つっ—ことで、お前らはこれから俺たちの支持下で戦うか、ここを抜けて第1層で引きこもってるか自由を選べ」

オルガはドスの利いた声かつ冷酷にプレイヤーたちを見下しながら言い放ち、キリトと三日月を引つ張り、4人で固まる姿勢を組みだした。

「……なんで私まで?」

「流星に女1人だけ放置ってわけにもいかねえだろ」

(可愛いと思ったから、じゃないんだ)

プレイヤーたちはオルガのあつという間の宣言に驚いて、そのままお互いに相談し合つて騒めき出していた。

一先ずの状況をなんとかしたオルガは、ギルド作成をしようとした。しかし、そう言えどオルガはギルドというものはキリトから教わつてはいたものの、作り方は教わつていなかった。

「… わりいオルガ。ギルドを作れるのは第三層からなんだ。そこまでパーティーつて事で…」

「… ふう…」

オルガは先程はあれだけ威勢が良かったというのに急に弱々しい声を出した。

しかし三日月が鋭い視線を送った瞬間にわざとらしい咳払いをして軽く手を振る。

「そうか。分かった。さてと…キリト、これで第2層に行けるんだろ？ だつたら行くぜ。」

オルガは振り返り、キリトに先へ行くぞ、と首で指し示した。

「待つて」

オルガに続いて階段を登ろうとするキリトと三日月を、アスナは呼び止めた。

「どしたあ？」

「さつき戦闘中に私の名前呼んだでしょ」

「……呼び捨てにしてごめん。それとも、読み方違った？」

「どこで知ったのよ、私の名前。」

アスナが三人を問い詰めると、三日月は左上の自分のHPゲージが表示してある部分に人差し指をスツ、と指した。

オルガも三日月と同じ部分を、ススツ、と指して何度も見るように促していた。

「……この辺に、自分の以外に追加でHPゲージが見えるだろ？その下に何か書いてあるか？」

「え？えーと……」

「顔を動かさしちゃだめ。目だけを動かして」

見かねた三日月がアスナの頬に触れて支える。距離も近い上にこのポーズだ。ここだけを切り取られればあらぬ疑いをかけられかねない。それをいち早く理解したオルガは「ミカお前……」と呟いたが、いいのか悪いのかそれが誰かの耳に入ることは無かった。

「キリ……ト、キリト？……オル……ガ、ミカツキ……これがあなたたちの名前？」

アスナは集中して自分のHPゲージが表示してある場所を凝視し、三人の名前を読み

上げていた。

そしてキリトたちに名前を尋ね、三日月とオルガは頷きキリトは小さく「ああ」と返すだけだった。

「ぶふっ……なあ〜んだ、こんなところにずうつと書いてあったのね！」

アスナは嘖き出し、笑いながらキリトたちの名前を見ていた。

オルガもつられて少し笑ってしまい2名は笑いながら、2名はただ黙って第2層へと続く門を開けて先へと進んでいった。

後に、ギルドとなる『鉄華団』は大きく名を轟かせることは皆まだこの時に知る由はなかった。

## 第四話 月夜の黒猫団

2023年、4月8日 第1層タフト。

あの日から約五ヶ月が経ち、攻略組は27層まで攻略が進んでいた。

前線に立つのはたった4人だけのギルド、『鉄華団』そして、SAO最強と言われる血盟騎士団を始めとした精鋭たちの揃った攻略組と言われる精鋭部隊であり、SAOのリリースを全て取っているのではないかと思われかねないその強さと信頼は絶対的な物となっていた。しかし問題がないという訳では無い。まだフィールドに出れてないプレイヤーは勿論、中層プレイヤーとの差も段々広がっていく一方。そのせいか、狩場の独占なども問題になっていく。なので長時間続けば他のギルドに排除依頼が回り、吊るしあげられるという処置はあるものの、あまり意味は成してない。

だからオルガ達鉄華団が素材集めのために中層に来たのは褒められた行為ではないのだ。

そう褒められた行為ではない。間接的とはいえ、人のものを奪っているような物だ。批判されど感謝されるわけがない。

しかし今の状況はともそうは見えないと鉄華団メンバー全員が思った。

「我ら、月夜の黒猫団に……乾杯！」

「乾杯！」

若い数人の男女が各々のグラスを持ち上げて打ち付ける。零れた飲み物はS A Oは固形の物とは違い、机に落ちて机を濡らす。

つまり祝杯を上げているのだ。それもボスを倒したからでは無い。単に狩りを終えたからである。それも単なるmobだ。では毎日上げるかと言うとそうでも無い。彼らの飲んでいるワインは彼らからしてみれば高額な筈。では何を祝っているかと言うと一つの出会いを祝っているのだ。

「んでもって、命の恩人、鉄華団の皆さんに……乾杯！」

「乾杯！」

「乾杯」

「か、乾杯……」

オルガや三日月、一層の時には溢れていたアスナさえも乗り気で乾杯と言ってグラスを打ち付ける。その中でキリトがたった一人、ついていけないように、呆気に取られながらも酔わない酒を掲げる。

S A Oでいくら酒を飲んでもアルコールが身体に行く訳では無いので酔うことは無

い。たまに気分だけで酔っている者がいるがあれは酔っているというより酔っているふりをしているだけだ。と思う。なので未成年がお酒を飲もうと別に良いのだ。

下層で攻略組を目指して戦っている、鉄華団よりは人数が多くとも少数のギルド『月夜の黒猫団』。確かに鉄華団は彼らを助けて、襲ってくる低レベルのゴブリンを殲滅した。しかし普通ならあつても会釈で終わらせるだろう。

「サンキュー」

「助かったよ」

「ありがとう、本当にありがとう！助けに来てくれた時、本当に嬉しかった」

「いや・・・別に俺は・・・」

キリトはまだこういう祝杯に慣れていないのか、それとも礼を言われたのを驚いているのか一つ一つの動きがぎこちない。

「やっぱ攻略組の鉄華団ってだけあるなー！」

「あのーオルガさんたち、大変失礼だと思うんですけど……レベルっていくつくらいなんですか？」

月夜の黒猫団リーダーであるケイタが、他のメンバーたちが三日月やアスナたちに礼を述べている中でオルガに質問をしだす。

オルガは持っている盃に入っている飲み物を一気に飲み干し、テーブルに置いてから誇るような顔で4本の指を立てた。

月夜の黒猫団メンバーは次元が違うと感じたのかそれぞれの顔を見合わせて首を傾げる。

「団長。分かってないよ。40です」

「よ、40!？」

すかさずアスナが助け舟を出す。

それでも理解不能だったのか月夜の黒猫団は驚き、一歩退いた。

「俺たちの倍くらいあるってだけあって、4人だけでも最前線で戦えるんですね……」

「ケ、ケイタ。敬語はよしてくれ。いくらレベルが倍くらいある攻略組とは言え、一人のプレイヤーであることは変わらないじゃないか」

オルガは敬語で話すケイタに右手を差し出して手で制するようにしてから語りだす。

自分の実力を認められて調子に乗ったのかまた新しい酒を用意するオルガと先程までついていけなかったものの、オルガを抑えるキリトを見て月夜の黒猫団は驚いた表情をしながらお互いに顔を向けたあと大笑いをした。

「そう……そうか。じゃあさオルガ、急にこんなこと言って難だけど……って言うか本

「当に不躰なんだけど、よかったら暫くウチのギルドを一緒に鍛え上げてくれないか？」  
「ダメだ、最前線でやったとしたらアンタらからすればただの雑魚でもボス級に感じるはずだ」

「でも、ウチは前衛が出来るのはメイス使いのテツオだけで… サチ！」

ケイタが呼んだのは月夜の黒猫団の紅一点。サチだった。

「コイツ、サチって言うんだけど前衛が出来る盾持ち片手剣士に転校させようと思うんだ。サチは勝手がわからないみたいで、どうにかレクチャーしてやって欲しいんだ。頼めるかな……」

「何よ、人を味噌つかすみたいにな……だって、急に前に出て接近戦やれって言われてもおっかないよ。」

勝手に話が進んでいくようで、オルガは小さくため息をついたが三日月はオルガをじっと見ていた。

「どうすればいいのか、と訴えかけてくる目にオルガはやれやれ、と言った表情でケイタたちを見る。」

彼らの目は強く、真つ直ぐだ。数値的パラメータが重視されがちなSAOではあまり意味が無いように感じられるのだが、オルガはそれをレベルよりも大切にしていて。しかし攻略組で引つ張るといふのは無理だろう。攻略が滞るので周りにも影響が広が

るし、なら俺もと多数のプレイヤーが募集してくるに違いない。

「やっぱ鉄華団でアンタらを引つ張っていくのは無理だ。……けどな、ミカをそつちに一時的にやってほんのちよつと上の層に行かせるだけってんなら出来るぜ」

「団長、いいの？三日月くんが抜けたらウチのギルド3人になるし、そもそも頼れる前衛がいないのよ？」

「仕方ねえことだ。それに俺でも前衛は出来るぜ。盾剣士でもやれるつてのは前からずつと見せてきただろ？」

「もう……行き当たりばったり過ぎない？」

オルガの急な提案にアスナは頬を膨らませてからため息をつき、キリトも軽く笑っていた。

三日月は三日月で月夜の黒猫団を見て、「自分1人で彼らを守りつつ強くする」と言う事に納得し、頷いた。

「ミカもたまには鉄華団に戻ってやれば大丈夫だろ」

「確かにな……今攻略は血盟騎士団と聖竜連合が主としてやってるから少数ギルドの俺達も羽を伸ばすチャンスだな。今のうちに三日月とのレベル差も埋めといた方がいいだろうし」

キリトも気づいていないが少々失礼な事を言いながら納得する。月夜の黒猫団のメ

ンバーもその言葉は気にならず、三日月が来てくれるということに希望を持った。

「ミカ、お前は行けるか？」

「オルガが望むなら、俺はやるよ。」

「そっか……ありがとう、オルガ！そしてよろしく、三日月！」

「うん」

三日月はポケットから取り出した小さな小袋から木の実を取り出し、1つ食べてから月夜の黒猫団メンバーにも手渡ししていく。

彼らは不思議がって居ながらも木の実を食べ、頬を緩ませるものもいれば青ざめて飲み物で流し込む者もいた。

「これ、たまにハズレあるから」

「じゃあなんで食わせたんだよ……」

「なんとなく」

「なんだよそれ……」

月夜の黒猫団に一時的に三日月が入団することとなり、三日月は鉄華団にいなながらも月夜の黒猫団に身を置くこととなった。

翌日に三日月が月夜の黒猫団と共に狩りに行くと言うことになり3人は先にタフトの宿屋から出て行った。

翌日、第20層フィールド、ひだまりの森でカマキリのモンスター、キラーマンティスと彼らは戦っていた。

「きゃあつー！」

前衛となるのに慣れていないサチは片手剣の使い勝手がよくわからず、後衛からのアシストがあつてもほぼ機能していなかった。

三日月は黒い片手で使うメイスを両手で握りしめ、サチの盾の守備範囲以外のところから刃を向けるカマキリのモンスターにとびかかった。

「ふっー！」

そのまま三日月は横薙ぎにメイスを払い、叩きつけるようにしてキラーマンティスの関節をちぎり飛ばした。

「スイツチ」

続いて片方だけになった刃で攻撃してくるキラーマンティスの攻撃を三日月はソードスキルで弾き、テツオに目配せしながら声をかける。

そのままテツオは走り込み、三日月が使った物と同様のソードスキルでキラーマンティスの腹部を殴打、そのままキラーマンティスはガラスのように砕け散り、ポリゴンとなって消滅した。

その後もしばらく狩りは続き、1段落したところで休憩として軽食と水の入った瓶を用意し草原に寝転んでケイタは新聞記事を眺めていた。

「攻略組28層突破か……スゲーな」

「別に、普通でしょ。」

「……三日月が普通でも、僕らにとつちやスゲーんだつてば。ところで三日月、攻略組と僕たちつて何が違うんだろう?」

「……度胸?」

三日月はイマイチ月夜の黒猫団と攻略組の違いをわかっていなかったため、曖昧な答えを返すことしか出来なかった。

が、あなたがち間違っているわけでもなかった。月夜の黒猫団は戦う際に怯えているところが僅かにあったり、勢いよく踏み込めていないためにソードスキルでクリティカルを出せない。

三日月のように死を恐れるどころか相手を殺す事に特化した殺戮マシンの如く動き回れることが出来なければ攻略組に入れても精々2軍が限界なのだ。

「そっか、度胸かあ……僕の答えと似てるかな。僕の答えは意志力だと思う」

「意志力?」

「仲間を……いや、全プレイヤーを守ろうとする意志の強さつて言うかな。僕らは、まだ

守って貰う側だけど気持ちじゃあ負けないつもりだよ。勿論、仲間の安全が第一さ。でも、いつか僕たちも攻略組の仲間入りをしたって思ってるんだ」

「そっか、なら頑張らなくちゃね。もっともっと、こんなのじゃあ足りないくらいに。」  
「へへっ、そうだな。」

ケイタが照れて鼻をこすっていると、月夜の黒猫団メンバーのダツカーがケイタの首をぐいぐいと絞めながら茶々を入れる。

「かーつくいい、さっすがリーダー。」

「俺たちが鉄華団や血盟騎士団の仲間入りってか〜？」

「目標は高く持とうぜ？まずは全員、レベル30な！」

「無理だよ〜！」

どっ、と黒猫団メンバーの中で笑いが起きるところには、三日月も頬が緩んでいた。

三日月は気づいていないがケイタの理想は間違っておらず、鉄華団がいても血盟騎士団、聖龍連合たちは空気が閉鎖的になっていた。

そのために明るい志を持ったケイタが攻略組に入れば、攻略組達の空気を変えてゲームクリアへの道が早まる。

例えそれに気づいていなくても、三日月はケイタたちのためには頑張らなくては、と

よりいつそうやる気を出していた。

その後もケイタの方針に沿った狩りが続き、三日月が殴り、テツオがそれを見習い、その後ろをついていくようにするサチ。

と、三日月が加わっただけで狩りのスピードは急速に上がっていた。

そして、夜になって宿屋に戻ってから三日月を含めたメンバー全員を集めたケイタからの声が上がった。

「え、今回の狩りで……20万コル溜まりました！」

「お〜！」

ケイタがそう報告すると月夜の黒猫団全員が喜び鉄華団と会った日のように手を上げて暴れるように喜んだ。

「ふ〜ん……」

その中でたった一人三日月のみは自分は関係ないとも言いたげにドライフルーツを口の中に入れた。

「そろそろ、俺たちの家を持つことも夢じゃあないな！」

「いいね、それ。」

「そう言えば、鉄華団にも夢はあるんだっけ。」

「うん。」

家を持てる、と言う事にワクワクしてきたテツオ、三日月に話を振るサチ。

だが家を持つ前にも反対意見は上がり、ダツカーが「サチの装備整えた方がいいんじゃない？」と言った。

「あゝ、確かにそつか。シヨボい片手剣じゃなあ……」

「私は……いいよ、今のままでも。それに、寛げる暖かいお家の方がずっといいよ。私のためにも、皆のためにも。」

「でも遠慮するなよ。いつまでも、三日月に頼りつきりつてのはマズいだろ。」

「別にいいよ、これが俺の仕事だし。」

サチは装備の変更を断るが、ダツカーはサチの装備をどうしても変えたいのか、それとも三日月のためを思ってなのかサチに続けて言った。

が、三日月は全然気にしていない様子で断り、今日の狩りの報告などをまとめてメツセージでオルガへと送っていた。

「そつか、悪いな三日月……サチ、転向がキツイのはわかる。でもな、もうちよいなんだ。皆で頑張ろうぜ！」

「うん……」

サチはケイタの言葉にうなずきながらも、どこか暗い表情をして顔を下げていた。

その夜も更に深まり、月夜の黒猫団メンバーが寝静まっている所に三日月はこっそりと宿を抜け出した。

そのまま走り出し、転移門を使用してアインクラッド28層、オオカミヶ原まで来ていた。

そこでは赤く、骨が剥き出しだったり片目がつぶれていたりと異形な狼が別のパーティと交戦していた。

「……クライン」

第1層で出会った時とは見違えるほどに強くなっていたクラインは、自身の親友たちを誰一人欠けさせることなく攻略組の仲間入りをしていた。

彼らは俊敏な動きと良くとれている連携で1匹のモンスターを仕留め、そのまま武器を修めた。

丁度月明かりで三日月の姿が照らされたのか、クラインは三日月に気づいて顔を上げた。

「ん……おお。三日月じゃねえか！おい、雑魚は任せたぞ！」

「おーうー！」

クラインは仲間に雑魚の相手を任せ、そのまま三日月の元へと走り出した。

「最近見かけねえと思つたら、こんな所でレベル上げかよ。」

「そつちこそ。多いとはいえ危険だよ」

「はは、そつか。」

「それに、俺は今鉄華団にいないからレベル上げも遅れてると思うから……その分頑張らなきゃいけないんだ。」

「……そうか。じゃあ、死なねえ程度に頑張れよ。」

クラインは三日月を励ます言葉を送り、クラインのパーティメンバー……基、ギルドメンバーの仲間たちが三日月に狩場を譲る。

狩場を譲られた三日月は黒いメイスを構え、そのまま一人でモンスターを相手にし始めた。

クラインのギルドメンバーこと、風林火山のメンバーと共にそのまま狼ヶ原から撤退して行き三日月は一人で狩りを続けた。

「つたくよお……鉄華団はもう少し自分たち以外に頼ろうって気はねえのか……？」

クラインはそう言い残し、巻き込まれたり三日月の邪魔にならないようにと足早にその場を去って行った。

三日月も適度なところで狩りを止めて、そのまま転移門でタフトへと戻ろうとした時。

「ん……メール？」

三日月の元に一通のメッセー지가届き、三日月はそれを開いて読み始める。  
『ケイタです。』

サチが出て行ったつきり帰ってこないんだ。

僕らは迷宮区に行ってみる。

三日月もなにかわかったら

知らせて欲しい。』

「はあ……」

三日月はそのメッセージを読み終わってから小さくため息をついた。

これはあくまで月夜の黒猫団の問題であり、三日月たちがわざわざ介入するような事ではなかった。

そのために三日月はメッセージを読んだ状態にしながらも、ウィンドウを閉じた。

すぐに宿屋に戻ってはあれこれと言われるため、三日月は適当に歩き始めた。

「あ」

「……三日月。」

三日月が本当に適当にブラついてサチを探していると、本当にサチを見つけてしまった。

「……ケイタが戻ってこいって言ってた」

三日月は一応ケイタに頼まれた身であるため、そのことを伝えるがサチは俯いて三日月の言葉から耳を傾けることすらなかった。

「ねえ三日月」

「何」

「一緒に……どっかに逃げよう。」

「なんで？」

「この街から……モンスターから……黒猫団の皆から。……ソードアート・オンラインから」

「……何言ってるの？」

サチは突然三日月にこんな話を持ち掛け始めた。これは心中、つまり一緒に死のうと願っていた。

が、三日月はそんな気持ちは毛頭なかった。三日月たちは鉄華団を立ち上げた際に胸に誓っていた。

共に家族としてこのSAOを生き残り、共に生きてSAOを脱してから現実世界で出会い、共に酌み交わすために。そして、「本当の居場所」に辿り着くために。

「ごめん……忘れて。死ぬ勇気があったら、安全な町中になんて隠れないもんね。」

……ねえ、なんでここから出られないの？

なんで、ゲームなのに本当に死ななきやならないの？こんなことに何の意味があるの？」

“こんなことに何の意味がある。”

その言葉は三日月が忘れてはいえ、前世で死ぬ前にも言われた言葉であり、三日月はその意味を持つことなどはなかった。

しかし、三日月にはその意味が存在する様にしてくれた仲間がいた。

「……大義？何それ。そうだ、こんなことに意味なんてないよ。けど……俺にはオルガがくれた意味がある。何にも持っていなかった俺のこの手の中に、こんなにも多くの物があるんだから。生きる意味を見失っていた俺を、オルガは引き上げてくれて、辿り着くべき場所へそこに連れて行ってくれる。だから……ああ、面倒だな」

三日月はサチのために自分の言葉を語るが、サチに必要な言葉はそれではないと三日月はわかっていった。

が、その言葉を三日月はかけることなど出来なかったため、サチのために取り繕う言葉を見せるのか、自分の大切なことを語るのか。

その2つの気持ちで三日月は少し板挟みとなっていた。

「……私は、死ぬのが怖い」

「… そうなんだ」

「怖くて……この頃あまり眠れないの」

「……大丈夫、サチは死なない」

「ホントに？なんでそんなことが言えるの？」

どうして。そう言われれば三日月も理由を説明することなど出来なかった。

だが、三日月からすればそんな理由も保障も必要ではなく、もつと大事な物が別にあった。

「……ただ、俺はオルガやケイタに賭けてるんだ。攻略組を変えて、仲間を死なせないって言う事に。だからさ、サチも俺やオルガたちに賭けてみたら？」

「ホントに、私は死なずに済むの？いつか現実に戻るの？」

「うん。大丈夫」

サチは三日月の言葉を聞いてから感極まって安心したのか、そのまま涙を流した。

涙を流し、頬を緩ませて笑い、三日月に何かを抱くようなまなざしを向けていたが、三日月はそれに気づくことなどなかった。

その後、サチは宿屋に戻りケイタたちに謝罪の言葉を述べ、三日月はケイタに謝罪と礼を言われつつも早めに切り上げ、寝室へと向かった。

三日月が狩りで手に入れたアイテムなどを整理しているところに、部屋にノック音が

鳴り始める。

「いよいよ」

「ごめんね……やっぱり、眠れなくて。」

サチは枕を持って三日月の部屋に入り、三日月の使用しているベッドで寝ることに  
なった。

三日月は特にサチのことは深く考えてはいないはずだったが、気づけばサチをどう生  
かすかと考えていた。

（なんか変な感覚だな……まあ、いいか。）

ここじゃ死ぬのが怖い奴なんて沢山いる。だから、サチだつてそれと変わらない。

死ぬのが怖くてもついてくるんだつたら、きっとサチは……）

すると、普段使っていない脳みそをそれなりに使つたために考えながらも三日月はそ  
のまま目を閉じて眠ってしまった。

サチは眠っている三日月の手を握つたが、三日月はそれに気づくことなく眠りこけて  
いた。

（三日月……君に出会えて良かった……だから、私を現実世界に連れ出して。）

サチも三日月に対して心の中で願いながら、そのまま眠りに落ちた。

## 第五話 新月

「じゃあ、行ってくる。転移、始まりの町！」

翌日、ケイタがギルドホーム購入用の資金を持って転移門を使用して第1層へと転移した。

三日月もギルドホーム購入の際には立ち会ったためにギルドホームにはどれだけ悩むかと言うのがわかっていた。

そしてダツカーやササマルがどれだけ喜んでいるかというのもよく分かっていた。

「マイホーム購入するなんて、こんなに感動するもんなんだなー。」

「オヤジくせえんだよっ……と。」

「あはははは……」

ササマルがしんみりとした声でそう言うと、ダツカーが肘で小突きながらツツコミをいれ、テツオとサチがその場で笑い声をあげた。

三日月も笑い声をあげることにはなかったが、微笑ましい光景として見て小さな笑みを浮かべていた。

「なあ、ケイタが家を買に行っている間にさ、少し俺たちだけで稼がないか？」

「あ、家具を買うの?」

「じゃあ、ちよつと上の迷宮に行くか!」

テツオの提案に話題が切り替わる黒猫団。

サチが家具を買うことを楽しみにしていたのか、いつもと違って乗り気に、ダツカーもやる気を出していた。

「いつものとこでいいと思うけど。」

「上なら短時間で稼げるだろ?」

「それな。あと俺たちのレベルなら余裕だつて!な?」

「でも上は危険だ。確かあそこからトラップが強くなる」

「その時は三日月がどうか出来ないかな……?」

三日月が反対の意見を出す、ササマルとダツカーが調子づいたことを言ってしまう。

それだけならただ強く言えば止まるが、サチも両手を合わせてお願いをしてきたために三日月は反論の言葉が思い浮かばなかった。

渋々と三日月はそれを引き受け、そのままその時の最前線の三層下、27層の迷宮区へと突入した黒猫団と三日月。元々マージンも取っていた上に、三日月がいた事から危機的状态には陥ず、順調に狩りは進んでいた。

「言つたらう？俺たちなら余裕だつて。」

「もう少しで最前線に行けるかもな。」

「あつたばーよー……… つとー！」

ダツカーとササマルがまた調子づいたことを言いながら先頭を歩いていると、ダツカーが怪しげな壁の模様を発見して右手で触れた。

すると、その模様は光り出して動き出し、ガツチャガツチャと音を立てて扉のように開いた。

(隠し扉……ヤな予感がする。)

三日月がその隠し扉に疑念を抱いていると、ダツカーが扉を開けて部屋の中にあるものを確認した。

とはいえ、その部屋には中心にポツンと宝箱が置いてあるだけなのだが。しかしこの雰囲気は何かが違う。そう思った三日月は転移結晶を実体化させてから月夜の黒猫団の後を追つた。

「おつ、トレジャーボックスだ！」

「うっひょー！」

「あはは〜」

ササマルが真っ先にトレジャーボックスを目に入れ、ダツカーが歓喜の声を上げなが

ら宝箱に手をかけた。

テツオやサチもその状況を楽観視しており、三日月は嫌な予感がして表情を歪めていた。

しかしそんな三日月を気にすることもなく、ダツカーは三日月が制止の言葉をかける前に宝箱を開けてしまった。

「空っぽじゃねーか!」

ダツカーは宝箱の中身が空箱であることに驚いてすぐに閉めようとするが、直後にアラームのような警告音が部屋全体に鳴り響いた。

それが引き金かのように、扉が閉まり壁は封鎖されモンスターが次々に出現して黒猫団メンバーと三日月を囲んだ。

「トラップ……皆、今すぐ脱出するよ。」

三日月はメイスを右手に持つて構えながら左手で転移結晶をポーチの中から取り出す。

黒猫団メンバーも冷静に転移結晶を取り出し、左手に持つて掲げる。

「転移、タフト……あれ? 転移、タフトオッ!」

ダツカーが転移に必要なコマンドを叫ぶも、転移は実行されずにいた。

もう一度ダツカーがタフトへの転移を叫んだが転移結晶の効果は発動されずにいた。

結晶無効エリア。またの名をクリスタル無効エリア。転移結晶や回復結晶などといった高額ではあるが強力なアイテムが使えない場所だ。

「クリスタルが使えない……？」

「面倒なことになったな……」

サチは転移結晶が使えないことに冷や汗をかいて驚いた。サチだけではない。ダツカーもササマルもテツオも、そして三日月さえも軽重の差はあれどパニックしていた。数えきれないほどのモンスターに囲まれるだけならまだしも、転移結晶が使えないという異常事態。

最前線にいる鉄華団の一員である三日月はそれを経験済みではいたが、それを伝える前にこれが起きてしまった。

それだけではなく月夜の黒猫団にとって、クリスタル無効エリアと言う物は絶望的な空間だった。

「ふっ！」

三日月はメイスを振るい、自身に迫りくるモンスターを一撃で薙ぎ払って仕留める。

ソードスキルは発動させず、発動させたとしても自身への硬直がとて短い物を選択して。

「うわっ！あ……うわあああっ！うわあっ！うわああああああっ！」

三日月ならばこの程度のモンスターは大したものではなかったが、月夜の黒猫団にとつては集団で1匹や2匹を倒すのが当たり前。レベルのマジンは取っているとはいえ、この数では動き回ることすら出来ない。

この層にいるモンスターに数の優位を取られている上に、散らばった状態で多数のモンスターを相手しなければならなかった。

そのためダツカーは反応が遅れ、一方的に蹂躪されるかのようにツルハシを叩きつけられた。

結果的にダツカーのアバターはガラスのように砕け散り、ポリゴンとなってそのまま消えてしまった。

「ダツカーッ！」

三日月がダツカーの名を叫ぶも、三日月に優先してモンスターが集まり始めた。

三日月はそれでも慌てることなく1匹1匹確実に仕留めていくものの、それは正に多勢に無勢。

三日月は動くことが出来ないまでに囲まれていた。

「うわあああつ！」

「テツオっ！畜生……おらあああつ！へ……ぐわあつ！」

ダツカーの次はテツオが集中攻撃を受けて撃破されてしまい、それに怒ったササマル

がソードスキルを発動させた。

が、クリティカルやそれ以前の問題であり根本からのレベル差故に致命傷どころかダメージを与える事すら僅かだった。

そのまま硬直状態で動けないササマルを、モンスターはゆつくりとした動きで命事刈り取った。

「おいバルバトス……もつと寄越せ！」

コイツらを殺し切れるくらいに——」

三日月は第1層でバルバトスと一体化したような感覚を呼び戻すため、もう一度バルバトスへ語り掛ける。

しかしうんともすんとも言わず、三日月はひたすらに敵を倒しながらもバルバトスの名を呼び続けた。

「バルバトス、返事をしろ……バルバトスッ！」

「三日月——っ！」

「……クソツ、あつちが！」

黒猫団メンバーが3人死亡した中、サチはひたすら防御に徹して生き残っていた。

三日月はバルバトスののみを考えていたが、サチの言葉で我に返った。

そのまま敵を薙ぎ払い、サチの元に向かいせめてサチだけでも守り、サチと交わした

約束を守るために。

三日月は必死にメイスを振り、サチの元まで届けようとした。

「あつ……」

サチが目の前の敵の攻撃だけを防ぎ続けていると、後ろからソードスキルによる攻撃がサチを貫いた。

その攻撃はサチのHPバーを全損させ、サチのアバターはガラスのように砕け散りポリゴンとなって消滅した。

サチは死ぬ寸前に口を開いて何を言っていたか、それは三日月に届くことはなかった。

しかし、サチが死んだと言う一つの事実は三日月にあるものをもたらした。

「おいバルバトス……余計な鎖は外してやる。だから——さっさとコイツらを殺し切れる力をありつたけ——寄越せ。お前の全部、根こそぎ……」

三日月がそう呟くと三日月の目が緑色に光った。前世の記憶の一部である、大きな鳥のような兵器、モビルアーマーを討伐した時のようにその光は後ろに尾をひいていく。

そのまま三日月はメイスをただただ振るい続けた。ソードスキルも型もお構いなしに、目の前の敵をひたすら殺し続けるためだけに。

「もつとだ…… もつとおー」

三日月は本気で叫び、破壊不能であるフロアすら破壊しかねない程の大暴れをトラップが終わるまで延々と続けた。

その後、三日月は単身でトラップを脱出し、力業のみで迷宮区から脱出した。

「三日月が、攻略組がいて……どうして、どうしてこんなことになったんだよー！」

ギルドホームを購入してから、ケイタは黒猫団のメンバーが行方不明になったことに気づいて三日月を問い詰めた。

三日月から黒猫団メンバーの死も聞かされたことから、ケイタは三日月に怒りをひたすらにぶつけていた。

「どうして、どうして皆が死んだんだよ、三日月！」

「……ごめん」

「ごめんじゃないんだよ！ごめんで済んでたら皆死んでないだろ！なんで、なんで攻略組のお前がいても皆死んじゃったんだよ！」

「ケイタ、死んだ奴には……死んだ後でいつでも会える。だから今は、自分のできることを精いっぱいやるべきだと俺は思うよ。」

「ああ、そうかよ……じゃあ今すぐ会いに行くよ！さようなら……この悪魔！」

ケイタは三日月の非情な言葉を聞いてから、元々流していた涙を更にあふれさせた。

それだけではなく深く絶望して顔を苦痛の表情に歪め、口元だけを笑わせて半狂乱になりながらその層の扉から飛び降りた。

そのままケイタのアバターはガラスのように砕け散り、ポリゴンとなってアインクラッドから永久に退場してした。

「……………めん」

三日月はただ一言そう呟いて残し、オルガたちに月夜の黒猫団に何が起きたかをメッセージで送った。

鉄華団ギルドホームにてメッセージを確認したオルガたちは、すぐに三日月を呼びつけた。

「なあミカ……………お前がいて、どうして止めてやれなかったんだ。」

「ごめん」

三日月は下を向いたままピクリとも動かなかった。涙の一つも零さず、前髪で顔を隠すように下を向いていた。

「ごめんじゃねえんだ、ミカ……………俺らに命を預けてくれた奴らの信頼を裏切って死なせちまうってのは、筋が通らねえことだ」

「三日月くん……………私は今君を責めたいとは思わないけど、ただ……………慎重派だったはずの黒猫団を自信過剰にさせてしまっただけ殺したのは、貴方の責任でもある。と言う事を忘れ

ないで」

オルガとアスナから厳しくも優しい言葉がかかる。鉄華団であっても仲間が死ぬことはよくあった。元々自分達はそういう商売をしていたので生と死の境目にいることは珍しくない。しかし前世のそれと今回の月夜の黒猫団の事件は何かが違う。そう思った。ゲームであっても現実であっても人が死んだ事は変わらない。その仲間が大切な仲間で守りたい人だったことも。

死んだことは自分、つまり三日月・オーガスのせいだろうか。アスナの言う通り慎重だった月夜の黒猫団を調子に乗らせる結果を招いたのは自分だ。しかし死んだのは月夜の黒猫団だ。悪いのが自分なら自分が傷つくべきだ。しかし傷ついたのは彼ら、月夜のことには無かっただろう。自分もそうだったのだから。

弱いのが悪いのか。その時脳裏に前世のことが思い出される。火星の町で自分と同じくらいの年の少年少女が飢えて死に、力を持った物に殺されていた。彼らと同じではないか。ここはゲームであるが彼らの身体がポリゴン片となり砕け散るのと弱いものが飢え死にするのと何が違う。死体があるか無いかの違いだ。同じだ。弱いものが淘汰されるということのみはこの世界でも同じなのだ。では、目指した場所はここではない。辿り着くべき場所、俺達の本当の居場所はここではない。

「ミカ：：？」

「三日月君：： 彼らの死を無駄にしないで。まだゲームは：：」

三日月のその様子を見て不自然に思ったオルガは三日月の名を呼ぶ。同じく不自然に思ったアスナは三日月の気持ちに汲み取ろうとする。

しかし両方の言葉は三日月の耳に入っても三日月の中に響くことは無かった。

三日月はもう本当の居場所の事しか頭になかったのだ。みんなが、大切な人達が死んだのはここが本当の居場所では無いから。ではそれは何処か。茅場晶彦は言っていた第100層を攻略しろと。しかしそれが本当の居場所なのだろうか。

「ねえ、オルガ。ここは本当の居場所なの？」

「ミカお前：：今はそんなこと言ってる場合じゃ：：」

その時いまままでに感じたことの無いような不快感に襲われた。そんなこと。オルガは確かにそう言った。本当の居場所という言葉が聞こえていながらそう言ったのだ。有り得ない。有り得ていいはずがない。前世でも今世でもその為だけに生きてきたのだ。本当の居場所、そこに導いてくれるからオルガについて行つた。死ぬ危険性が高い仕事だつて文句一つ無しで行つたし、みんなを守つた。自分だけではない。いままですんで行つた鉄華団団員全てがオルガにかけていたのだ。それをオルガは無視するよいうな発言をしたのだ。それではいままですんで行つた仲間は何の為に死んだのか。

勘違いだ。勘違いであって欲しい。その可能性を頭に置くことで正気を保てた。

「そんなこと…？ ねえオルガ。じゃあ俺達はなんのために戦ってきたの？」

自分でも分かる。動揺していると。口は震えて、寒い。全身が鳥肌になり、スつとわかりやすく、血の気が引いた。先程の不快感と合わさって吐き気を催している。

見かねたアスナが止めようと動いているのが見えたがオルガに止められて下がる。

「そりゃ…このゲームを終わらせて現実世界に帰るため…」

「そこが本当の居場所なの？」

「…ミカ。もう終わったんだ」

もう限界だった。

これはオルガでは無い。そう思ったのだ。強烈な吐き気と不快感だが、ゲームだからか何一つ出てこなかった。胸を締め付ける、その痛みも感じない。しかし苦しいのだ。痛くないのに、苦しいのだ。

ずっと求めてきた、その為にオルガにかけてきたのに、裏切られたのだ。

オルガなら連れていってくれると確信していた。その為にオルガは自分を生かし、共に行くための物として扱っているのだと本気で思っていた。辿り着くべき、本当の居場所。小さい時から、いや生まれた時からオルガと一緒に求め続けてきた。次第にそれに乗ってくれる人は増え、鉄華団という集団になった。みんなと一緒に本当の居場所に行

くために頑張ったのだ。必要以上の阿頼耶識を付けて、戦場に命を差し出し、悪魔と契約した。しかし勝てなかった。でもオルガさえいればオルガが俺達の居場所になってくれる。そう思った。そして付いてきたというのに。オルガはそれを否定した。

オルガは顔を近づけてアスナに聞こえないような声で言う。

「ミカ。もうここはあの世界じゃない。本当の居場所は求めなくてもいいんだ」

しかし聞きたくなかった。もう限界は迎えていたからだ。もうこれはオルガではない。オルガと同じ声、同じ身体を持った、オルガの抜け殻のようなものだ。

「終わってない……何も終わっていない……まだ俺は、生きている……」

「ミカ……」

もうこいつは導いてくれるオルガじゃない。本当の居場所に導いてくれる人ではない。じゃあ誰について行けば本当の居場所に辿り着けるのか。最初から今ままでずっとオルガを信じてきた。他の誰かを信じるということはしなかった。オルガが本当の居場所に連れていってくれろと信じていたからだ。でもオルガは本当の居場所に行こうとしていない。諦めてしまったのか、そもそもやる気が無かったのか分からないがどっちでもいい。もうやらないという点では一緒だ。

決断するまで遅かったがここで確信した。このままでは本当の居場所に辿り着けない。オルガはそこに行こうとしている人ではなかったのだ。価値はない。

二人に背を向ける。このギルドにいる意味も無い。こんな所、さっさと出て行つてしまおう。ギルドの脱退を申請した。

それを見てオルガは目を見開いて驚く。ずっと自分を信じてきた者が裏切つたのだ。当たり前だろう。しかし自分もオルガに裏切られたのだ。

「待つて、三日月君！責任を感じて辞めることなんてない。反省して次に繋げよ？ね？」  
アスナが二人の間に入つて励ますように優しい声で言う。確かにアスナは優しい。キリトも強くて良い奴だ。しかし二人とも本当の居場所を求めていない。なのに二人を巻き込む訳には行かない。

「ごめんアスナ。俺は本当の居場所に行きたいんだ。行かなくちゃ、行けない」  
「三日月君：：分かった。キリト君には私から伝えておく」

三日月の目を見て覚悟したのかアスナは名残惜しそうに一回頭を撫でた後、ゆっくりと引き下がった。

その後オルガとアスナに顔向けず最後の挨拶も無しに歩き出した。  
自分の顔は鏡を見なくても分かる。全てに絶望した顔だ。

# 出会い

第一層はじまりの街。

あれからもう1ヶ月たった。しかしまだ本当の居場所に連れていってくれる人は見つかっていない。

無理だったのだろうか。そもそも不可能な事でそれをオルガが言って自分を利用していただけではないかとあらぬ疑惑を抱いてしまう。

しかし自分がそこに行きたいということは何一つ間違っていない。自分が産まれたあの日からその気持ちは一瞬たりとも揺らいでいない。

手を伸ばしても届かないという訳では無い。それ以前の問題だ。どこに手を伸ばせばいいのか分からないのだ。

オルガと一緒にいた頃から考えて、強くなればいいのかもしれないと当たりを付けて動くことしか出来ない。それも裏切られたオルガの言っていたことをするしかないのだ。

だからなのだろうか。オルガの言うことの逆をしようとしたのか何故か分からないが最近よく一層に足を運ぶ。何かをする訳でもない。アイテムは上より品揃えは悪い

し、まともな宿は無いし、フィールドに出ても一層ではまともなお金も経験値も得られない。このゲームでは走っても、懸垂しても体力はつかない。つまり、することと言えば探検という名目の散歩だ。

「……」

隣には誰もいない。前にも、後ろにもいない。少し前まではそこに元気がある仲間がいた。自分が強くなかったから救えなかった。全てを消してしまった月夜の黒猫団という仲間たちが。

——三日月、こつちこつち

ふいに頭に彼女、月夜の黒猫団のうちの一人であるサチの声が響く。声が聞こえた方向、後ろを向いても誰もいない。当たり前だ。本当に全てなくなってしまったのだから。髪の毛一本残さずにポリゴン片となり、消えていった。自分はその様を見ることが出来なかった。その後悔から来る幻聴なのだろう。でもその声が何故か心地よかった。普通なら呪われているとか考えるその声が何故か嬉しかったのだ。

オルガなら死んだ奴には死んだ後に会えると言うだろうが、そのオルガの言うことは正しくない。だから精一杯後悔してもう会えないことを悲しむことしか出来ない。

その少し前はキリトとアスナ、たったの四人という小數ギルドとしての鉄華団がいた。三層から始まったエルフキャンペーンの時の二人は特に仲がよかった。とあるエ

ルフを姉のように慕うアスナとキリトはとてもいいコンビだ。エルフキャンペーンが終わった後も、出会った当初あったアスナの棘も無くなり、自分とオルガにも優しくなった。自分が月夜の黒猫団に行く前は料理スキルを鍛えていた。もし完全習得した<sup>コンプリート</sup>らなんでも作ってあげる。そう言っていた。

キリトもそのゲームセンスと気楽さには色んなものを見させてもらった。本気で前世では自分と同じように戦っていたのではないかと思ってしまうほどだ。キリトと自分の強さは変わらずほんの少しだけ自分の方が勝っていた。今は、もうキリトの方が強いだろうが。

そしてそれより前には鉄華団があった。SAOでのギルドとは違う、少年兵の集団。そこで自分達はオルガの命令に従って、目の前の敵を殺し、道を切り開いてきた。戦場に出て、仲間を失ってしまうことなどよくあった。それでもみんな、オルガと一緒に本当の居場所を目指していたのだ。命を捧げる覚悟、ではなく本当に命を差し出して。全てをかけて、犠牲にして。そして敗北した。ダンジがギャラルホルンのモビルスーツに蹴り飛ばされて、ビスケットはモビルスーツに吹き飛ばされて、アストンが敵に深入りしたせいで潰されて、シノが集中砲火を浴びて、そして記憶はそこで消えている。恐らく自分もオルガのくれたと思っていた意味を抱いて戦っていたのだろう。あの世界にはまだアトラヤクーデリアも居るはずだ。確か子供が何か言っていた気がする。その

子供は産まれたのだろうか。男の子だろうか、女の子だろうか。元氣なのだろうか。何一つ分からない。

あの頃抱いてた物は何処へ行つてしまったのだろうか。本当の居場所という希望、そして同じ方向を見ていた仲間。阿頼耶識で繋がっていたバルバトスも、全て失いこうして路頭を迷っている。

オルガに裏切られたと分かつた時、オルガの事をまるで抜け殻だと思つたが今の自分も抜け殻のようだ。何処へ歩けばいいのか分からないから保を進めることが出来ない。一歩足を出しても進んでいいのか戻っているのか、全く別の方向へと行つてしまっているのか分からない。

不意に頭を上げるとそこには見たことの無い景色が広がっていた。今までの事を考えている間に知らない場所に迷つてきてしまつたらしい。来てきた道を戻ろうにもどうやってここまで来たかが分からない。マップを出せばいいのだがその考えは自然と浮かんでこなかった。

「ハハハ…  
Hic」

いままで声を出していなかったからなのか掠れた声が響きもせずにその場に残る。

まさかここが本当の居場所…とは思わない。歩いてるだけで辿り着ける居場所では無い。単にアインクラッドの中で最も広い一層の街の一つであるはじまりの街で

迷子になったただけだ。モンスターもいないのでフィールドに出てきたわけでない。どちらにしろ、一層のレベルのモンスターなら囲まれても寝ることが出来るが。まさか一層に自分とまともに戦えるモンスターがいるとは思えないのでこの辺りで1回休憩しよう。そう思った時に気配に気がついて後ろを向くとそこには大きな建物があった。青灰色の屋根のてっぺんには十字と円を組み合わせた金属製の何かが輝いている。

確か協会という建物だった筈だ。各街に幾つかある建物でモンスターの特別攻撃、呪いの解除や対アンデットモンスターの為に武器の祝福が行える場所だ。しかしあまり入ったことがない。必要がないと言えばそれまでだが何か胡散臭い宗教勧誘を想像させて入ろうとはしなかったのだ。

しかし今は、何故かこの中に入ってみたいと思っている。何か不思議な力に押されるように協会の扉を開けた。

「行けー!」

「うおおおお!!」

その瞬間、自分より小さな人影が沢山集まり、津波のように押しかけてきた。咄嗟の事だったのでメイスを展開してしまっただがこいつはプレイヤーだと言いつつこれを中斷させる。

人影が自分に触れる。圈内なのでいくらやり合ってもダメージは入らないが脳裏に

死という文字が掠めた。指が震える。そしてそこを上手く通るようにメイスが手から落ちた。

そのメイスに目が動いたと思つた瞬間、視界が真っ暗になった。

痛みは感じなかった。その不自然さからここはゲームなんだと言うことを思い出す。その為か殺意という感情は欠片も出てこなかった。目を恐る恐る開けるとそこには自分より小さい子供たちが砂糖に群がる蟻のように群がっていた。わらわら集まつてくるものだから気味悪くも感じてきたがここで力を出してしまうとこの子供たちを吹き飛ばしかねない。圈内なのでダメージは入らないが自分の中に残ったかすかな道徳心がそれを止めた。

その時だった。

「あなた達！止めなさい！」

声が聞こえた。若い女性の声だ。その声にびびつたのか、小さいプレイヤー達はそそくさと協会の中へと入っていった。

「すみません…。子供達が…」

そう言つて駆け寄つて来る女性プレイヤーを凝視する。黒縁の眼鏡をかけて、その眼鏡の奥には深緑色の大きな瞳がある。修道女のような青いドレスを着ている大体20代くらいの女性だ。その女性がこちらに歩きよつて来た。そして手を差し伸べてきた。

その情景が記憶に引っかかった。

—俺はこれを知っている

俺が生まれた、記憶。少し暗い道でオルガに差し伸べられた手。そしてオルガが示してくれた本当の居場所。そうだ。俺はオルガに助けられて、そしてその本当の居場所を共に求めたんだ。

俺の命はオルガに貰った。だから俺の命はオルガの為に使わなくちゃいけない。

でもそれは違う。オルガは求めてない。じゃあなんでオルガはそこにいた。俺に与えてくれたのはなんの為に。

オルガってなんだ。オルガとは誰だ。オルガというのはどんな存在だ。なんのために存在している。

鋭い頭痛がする。オルガは本当の居場所は。結局何でなんの為に。そう答えのない自問自答を繰り返していたから脳が限界にいかないようにしたのだろう。バルバトスに繋がる前までどうせ使わないと思った頭をこれ程使うとは思わなかった。

そう思った時には自分はその女性の手を掴んでいた。温かい。同じ布団に入っていたサチを一瞬だけ思い出させる温かさだ。生きているもののみある温かさ。それを感ずる。女性は自分を立てさせる。

「すみません、普段お客様なんて来ないものですから」

「う、うん」

自分より少しだけ大きなその女性が普通に喋っているだけなのに何故か余裕が無くなってしまうっている。

この人はオルガと同じように見えて全然違う。この温かさはオルガには無かった。そうか。俺はオルガの元を離れた瞬間に死んだんだ。そしてこの人に……

と考えたところで思考が止まる。

「私、サーシャって言います」

「三日月……オーガス。よろしく」

何故かこの事は一生忘れないだろう。自分はそう思った。